2023年3月29日　第57号

JSSH NEWS
日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

目　次

● 第65回日本手外科学会を振り返って
● 第66回日本手外科学会学術集会の開催にあたって
● AAHS学会記
● 手外科バトンリレー（第10回）
● 第14回 手外科医のリスクマネジメント
● Joyの声（第7回）
● リレーエッセイ：技術紹介
● 認定施設紹介
● 委員会報告
● 日本手外科学会関連のお知らせ
● 関連学会・研修会のお知らせ
● 編集後記

第65回日本手外科学会を振り返って

酒　井　昭　典
産業医科大学整形外科学

2022年4月14日（木）、15日（金）の2日間、北九州市小倉北区の西日本総合展示場新館とAIMビルで、第65回日本手外科学会を開催させていただきました。現地参加とオンデマンド視聴のハイブリッド形式で、大きなトラブルなく盛会裏に開催できましたことを会員の皆様にご報告いたしますとともにお力添えをくださいましたことを心から御礼申し上げます。2、3年ぶりにお会いする手外科の先生がたも多く、対面での開催に感謝の言葉をいただきました。

現地の参加者数は959名、学会の登録人数は2,045名でした。平田仁理事長（当時）から「手と脳」に関するご講演いただきました。特別講演として、三浪明男先生（北海道せき損センター）には「手外科医の進むべき方向性と将来展望」について、篠田謙一先生（国立科学博物館）には「ゲノムで解明する日本人の成立史」について、加々美高浩氏（アニメーター）と蜂須賀裕己先生（土屋総合病院）には「手の描き方」と「手外科手術記録詳記のすゝめ」について、大変魅力的で有意義なお話をしていただきました。海外招待講演5（Drs. Kevin C. Chung、Anthony Berger、S. Raja Sabapathy、Philippe A. Liverneaux、K. Ming Chanのうち Dr. Kevin C. Chungが来日）、教育研修講演10、特別企画5（Travelling fellow sessionでは、4名のうち米国からDrs. Scott Tintle、John Fowlerの2名

が来日)、シンポジウム6、パネルディスカッション4、ビデオセッション1、ランチョンセミナー10、ハンズオンセミナー1という構成でした。一般演題(現地にて口頭発表＋オンデマンド配信)は398演題、一般演題(オンデマンド配信のみ)は187演題でした。

本学会では、労働災害やスポーツによる手の外傷や障害、労働者や音楽家などの手の職業性障害、生活習慣病と末梢神経障害の関連などを取り上げました。「労働災害による手の外傷と障害」、「重度上肢外傷治療のゴールドスタンダードを知る」、「手根管症候群と労働環境・生活習慣」などのパネルディスカッションを通じて、本学会のテーマである「手と職業・環境・スポーツ」を深く理解していただけたと思っています。「真の病態に迫る:基礎および臨床研究から」や「モーニングセッション: Hand surgery knowledge update 2022」では、学会場で講演を視聴するだけで最新の知識を得ることができ、早朝にも関わらず参加者が多くて好評でした。「手外科領域における人工知能と深層学習の活用」、「手外科領域におけるイノベーション:新しい医療材料・医療技術」では、最新の医療に触れることができ、「世界各国における手外科事情を知る」では、世界の趨勢を知ることができました。

学会を無事に開催できましたことを会員の皆様にあらためて心から御礼申し上げます。多くの先生がた、特に若手の先生がたにインパクトを与える学会になったことを願ってやみません。参加者の皆様にとりまして実り多い学会、記憶に残る学会となりましたなら望外の喜びです。

第66回日本手外科学会学術集会の開催にあたって

佐　藤　和　毅

慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター

この度、第66回日本手外科学会学術集会を2023年4月20日（木）、21日（金）に京王プラザホテル（新宿）で開催させて頂きます。慶應義塾大学としての開催は、1959年第3回学術集会岩原寅猪先生、1977年第20回学術集会池田亀夫先生、1990年第33回矢部裕先生（いずれも当時慶應義塾大学整形外科教授）以来、4回目となります。また、同門の会長としては、2009年第52回学術集会の会長を務められた堀内行雄先生（当時川崎市立川崎病院副院長）、2015年第58回学術集会会長の根本孝一先生（当時防衛医科大学校整形外科教授）以来、私で6人目となります。

未だ新型コロナ感染症は終息を見ませんが、本感染症がまもなく季節性インフルエンザと同等の「五類感染症」に移行される見通しであることを踏まえ、現地開催を軸にオンデマンドとのハイブリッド開催で準備を進めています。

学術集会のテーマは『原点と挑戦』と致しました。手はその精妙な構造により巧緻運動を可能にすると同時に、繊細な知覚機能を有し「第2の目」、創造性を支える「魔法の杖」と評されます。このような手がひとたび傷害を受けると、高度な障害を遺残し日常動作に支障をきたします。手外科医のすべきことは、障害を有する手を可能な限り正常な状態に再建して機能・整容の損失を最小限に留めることであり、その責務こそ手外科の『原点』と考えます。一方、かつて臨床および研究で世界を牽引してきた日本の手外科が再び「ときめき」を取り戻し、さらなる高みを目指すためには『挑戦』が必要です。本学術集会では、手外科の『原点』である手の機能・整容再建の重要性を再認識すると共に、最新の画像診断技術、新しい医療技術や医療材料、再生医療の最前線など、手外科のさらなる高みを目指す『挑戦』にも焦点を当てたいと思います。

一般演題に加えて、『原点と挑戦』のコンセプトに沿ったトピックスを中心に8つのシンポジウム、5つのパネルディスカッション、10の教育研修講演を企画致しました。岩崎倫政先生に理事長講演、上羽康夫先生（京都大学名誉教授）、大西公平先生（慶應義塾大学ハプティクス研究センター センター長）、高橋由伸氏（読売ジャイアンツ球団特別顧問）に特別講演、Daniel Herren先生、Christopher Mathoulin先生、Steve Moran先生、Jeffery Yao先生、Eugene Ek先生、Joo Yup Lee先生に海外招待講演をお願いしております。海外からの6名の先生は全員が現地参加の予定です。

査読点数上位の演題6題（臨床、基礎各3演題）による優秀演題セッション、さらに、現地参加予定の7名のトラベリングフェロー（米国1名、香港、台湾、韓国各2名）によるセッション、第65回学術集会で好評だった朝のjournal clubを「Hand surgery knowledge update 2023」として企画致しました。また、4つのハンズオンセミナーに加え、スポンサードセミナーやワークショップも準備しております。

本学術集会が、臨床・研究の両面において手外科学のさらなる高みを目指す啓蒙の場になること、そしてご参加頂く先生方にとって実り多い学会になることを願い、慶應義塾大学整形外科上肢班の力を結集して皆様をお迎えする準備を進めております。多くの先生方のご参加を心よりお待ち申し上げます。

招待国として参加した 2023 American Association for Hand Surgery (AAHS) を振り返って

市　原　理　司

順天堂大学附属順天堂浦安病院 整形外科

2023年1月17-21日に米国フロリダ州マイアミで開催されたAAHSは、JSSHがguest societyでした。日本には寒波が到来していましたが、マイアミは平均気温が25℃と汗ばむ陽気でした。学会はJW Marriot Turnberry Miami Resort and Spaで5日間に渡り開催されました。学会長はJohn D Lubahn先生で、JSSH名誉会員である別府諸兄先生のLouisville留学時代の同僚の先生であり、諸先輩方の長年に渡る国際交流から、今回、招待国としての参加が実現したことを知りました。

学会初日はBoard Directors Receptionに招待頂いたので参加してきました。Director（理事）の半数を女性が占め、米国では一般的であるフィジシャンアシスタント（PA：創閉鎖や薬の処方などを医師に代わって行うスタッフ）が何人もDirectorとして参加しておられ、米国の手外科事情を詳しく説明して頂きました。学会は毎朝6時半から始まり、朝昼の食事は企業展示で自由に食べられ、夜は毎日何かしらのパーティーがあるため、早朝から夜遅くまで多くの先生が学会場で過ごされていました。企業展示も70%以上の会員が形成外科医ということもあり、様々な素材から作製された人工神経に関する展示や、イタリアMMI社製のSymaniというマイクロ手術用ロボットのハンズオンなど、興味を惹かれる展示が多数ありました。学会3日目朝に超満員の大ホールで開催されたセレモニーでは、岩崎理事長の代理で、招待国としての挨拶を国際委員会委員長の市原がさせて頂きました。極度の緊張状態のため、朝8時にも関わらず“Good afternoon”と挨拶してしまい、慌てて

招待国として会場から拍手が送られている様子

「Jet lagのせいだ！」と弁解し会場を沸かせたのも良い思い出となりました。スピーチ直後に学会長のLubahn先生に“Nice Presentation”と握手を求められ、この瞬間に努力は必ず報われると感じました。今回のAAHSには、JSSHから約30名の先生に御参加頂き、別府諸兄先生、柿木良介先生がInstructional course lectureをされ、また多くのJSSHの先生がOral presentationで素晴らしい研究の成果を発表頂き、学会を大いに盛り上げて頂きました。3日目夜にマイアミビーチ沿いのレストランで開催された会長招宴には、多くのJSSHメンバーが招待され、米国手外科学会の先生方と親睦を深めさせて頂きました。

今回、AAHSに参加された同年代や、若手の先生と交流が深められた点では、非常に有意義でしたが、もっともっと若い先生達が国際学会に参加できる環境作りが必要であることを再確認しました。今後も、国際委員会として様々な試みを行っていきますので、是非、若手の先生方は臆することなく国際学会に抄録を投稿してください。

招待国代表として国際委員会委員長の市原理司が挨拶

ICLでの柿木良介先生の講演

ICLでの別府諸兄先生の講演

セレモニーが行われた大ホールで、JSSH会員で記念撮影
（左から原口敏明先生、吉田史郎先生、市原理司、別府諸兄先生、鈴木雅生先生）

会長招宴での写真（左から、別府諸兄先生、平瀬雄一先生、柿木先生夫妻、
John Lubahn先生、小松一生先生、市原理司、稲見浩平先生）

会長招宴での写真（左から、柿木先生夫妻、Peter Amadio先生、別府諸兄先生、
John Lubahn先生、平瀬雄一先生、稲見浩平先生、市原理司）

手外科バトンリレー（第10回）
日本手外科学会（JSSH）国際委員会の思い出

別　府　諸　兄
日本手外科学会名誉会員
聖マリアンナ医科大学名誉教授

足掛け3年間にわたり新型コロナウイルスによる感染拡大による影響が続きましたが、感染症法上の分類で5月8日に「2類相当」から「5類」に引き下がることになり、これで一応日本も落ち着くと思います。しかし、新たなウイルスによる感染症が拡大する可能性も残されています。

さて、1月18日～21日までAAHS（American Association for Hand Surgery）がマイアミで開催され、JSSHはInvited Guest Nationとして招待されました。この3年間はコロナ感染拡大もあり海外の学会に出席することはなく、久し振りの国際学会でした。会長のJohn Lubahn先生は1981年同期のLouisville Hand Fellowでした。学会2日目には国際委員会委員長市原理司先生が学会でご挨拶され、30名以上のJSSH会員が出席されました。寒い日本とは異なり、フロリダでの学会は気温24度の素晴らしい天候のもとに開催され、WEBでの参加ではなく対面での学会参加は大変新鮮で楽しいものでありました。

30年前、学会の国際化に伴い、次期会長の広島大学生田義和教授が準備委員長となり、1993年に国際委員会を創設されました。そして、第1回国際委員会は故田島達也顧問、故山内裕雄担当理事、梁瀬義章委員長、故荻野利彦、小島哲夫、土井一輝、龍順之助、別府諸兄の各委員により開催されました。この間に色々な事業が行われました。

JSSH-ASSH Traveling Fellowshipの可能性について、私は1997年JSSHの国際委員会委員長として、ASSHの国際委員会委員委長のAndrew Palmerに直接交渉をしました。しかし、多くの国が希望しているので、JSSHとだけExchange Traveling Fellowshipはできないといわれ頓挫しました。そして、Bunnell Traveling Fellowとして来日していたScott Wolfeに相談しました。Bunnell Traveling Fellowで来日するASSHからのFellowをJSSHが訪問施設のお世話をする代わりに、ASSHが日本からのFellowの訪問施設を紹介してくれることで話がまとまりました。2000年の第1回　JSSH-ASSH Traveling Fellowとして、松下和彦先生、中道健一先生が選考され、その後、現在まで継続しています。

日米合同手外科会議は、1974年に日本で最初に行われ、その後1996年に第2回がハワイで米国側のホストJames Steichen のもとに行われ、日本側は故山内裕雄先生が対応されました。当時、Mayo Clinicに留学中の私はこの第2回日米合同会議に出席しました。この会議は両国から多くの参加者があり、大変良い学会となりました。そして、今後も定期的に継続しようという意見が強く出され、日米双方の学会間で折衝が重ねられた結果、第3回を再びハワイで日本側の主催のもと

に開催することになりました。第3回日米合同手外科学会2000年3月25日～28日　マウイ　Ritz Carlton Hotelで開催しました。この時の日本側代表は平澤泰介教授、実行委員会委員長別府、国際委員会委員長水関也先生で開催しました。参加者はJSSH医師61人（家族24人）、ASSH医師82人（家族50 人）合計217人で大変盛況でした。

第3回日米合同手外科学会2000年3月25日～28日
マウイ　Ritz Carlton Hotel　親善テニス大会

第3回日米合同手外科学会　故山内教授、故Prof. Bergerご夫妻と共に

この合同会議は5年毎にホストが交代して開催し、第5回日米合同手外科学会2011年3月26日～29日　マウイ　Grand Wailea Hotelは日本側がホストですべて準備が整っていました。しかし、2週間前の2011年3月11日14時46分に東日本大震災が発生し、急遽中止となりました。Hotelは事情を理解してくれ、キャンセル料は無料で対応してくれました。

また、日本手外科学会はアジアで最も確立した手外科学会であり、Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand（APFSSH）の中心的な役割を果たしていました。特にAPFSSHにはJournal of Hand Surgery Asian Volumeという雑誌があり、2003年からこの雑誌の事務局が香港から日本手外科学会に移りました。Editor in Chief は2003年－2009年まで生田義和教授、2009年から2014年までは三浪明男教授がなさり、国際委員会の私がco-editorとしてJSSHの手外科専門医の先生方に査読のお願いをいたしました。その後、雑誌の事務局は2015年から韓国にうつり、現在はインドにあります。この間に、生田義和先生が学会長で第5回APFSSH学会を2004年11月12日～15日、大阪で開催しました。Organizing chairmanとして色々な企画をし、日本のみならずアジア各国から多くの参加者があり、大変満足いくものでした。

国際委員会にはお二人の先生が大きく貢献をしてくださいました。2年前に亡くなられた故山内裕雄教授はInternational Federation of Societies for Surgery of the Hand（IFSSH）の会長として、多くの海外の手外科の先生と交流され、私共にご紹介をいただき、私もIFSSH Executive Memberとして仕事をさせていただきました。また、今年の1月27日に亡くなられた生田義和教授は国際委員会を1993年に創設されAPFSSHにご尽力をいただきました。このお二人の先生のご指導をたまわり、多くの貴重な活動に参加させていただき、感謝しております。

これからも岩崎理事長、池上国際委員会担当理事、市原国際委員会委員長を中心に日本手外科学会の益々の国際化を祈念しております。

橈骨頭骨折骨接合術中に生じた医原性後骨間神経損傷

日 高 典 昭
大阪市立総合医療センター 整形外科

手術手技に起因する術後の神経麻痺は、不可避的合併症の一つと考えて執刀医の過失はないと判断されることが多い。たとえば、大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後に発生した坐骨神経麻痺に対して、一定程度の可能性で麻痺が生じる危険性があるとして損害賠償請求を棄却している判例がある（奈良地裁、令和3年2月25日）。しかし、頚部リンパ節を摘出した耳鼻科手術において、副神経を誤って切断したのは術者の注意義務違反によるとして過失が認められた判例も存在する（前橋地裁、平成26年12月26日）。

橈骨頭骨折骨接合術において後骨間神経（PIN）を損傷したのは執刀医（被告）の手技に過失があると認められた判例を紹介する（医療判例解説、2022）。原告は実家から離れたA県の高校にスポーツ特待生として在学する16歳の右利きの女性で、同県内の寮で生活していた。X年11月に練習中に転倒して右橈骨頭を骨折したため、実家に近いB病院で被告による治療を受けた。手術は外側アプローチで行われ、当初はスクリューのみで固定する予定であったが、頚部に骨折が及んでいることが分かったため、プレート固定に備えて展開を末梢へ拡げた際にPINを部分的に損傷した。被告は損傷直後に気づき、拡大鏡下に神経縫合を行った。術後、母・示指の伸展は可能であったが、中・環・小指の自動伸展はできなかった。 X+1年2月頃まではB病院でリハビリを受けたが、3月以降A県に戻ってクラブ活動に専念したため、病院でのリハビリテーションは受けられなかった。同年10月のB病院での最終診察時に、中～小指の指伸筋の筋力はほぼ回復していたたが50度の回外制限が残存した。このため原告は、手術の際に執刀医が誤ってPINを切離損傷した手技上の過失と、後療法を適切に指導しなかった療養指導義務違反により運動神経麻痺が残存し可動域制限をきたしたことに対して損害賠償を請求した。裁判所は、B病院は自己訓練など指導しているため療養指導義務違反はなく、可動域制限は骨折自体の治療上で起こり得るものであり、原告にはADL上に不都合のある神経症状は残存していないとの判断を下したが、PINを損傷した手術手技には過失があるとして、約90万円の支払いを命じた（大阪地裁、令和4年3月30日）。

橈骨頭に対する進入法のうち、後外側からのKocher法では前腕を回内して回外筋を切離することによってPINを直視しなくても損傷は回避できるとされている（Hoppenfeld 1984）。しかし、Kaplan法のように少し前方から進入する場合には、末梢を展開する際に回外筋内でPINを損傷する

危険があるため、展開の初めに回外筋入口部でPINを確認すべきという記載がある（Morrey 2018、原 2016）。また、比較的安全な指伸筋splitting法でも末梢への剥離は腕橈関節から29mmまでに止めるべきとされている（Schimizzi,2009）。

一般に裁判において、過失があるかないかの判断は診療当時の医療水準によってなされる。本判例の判決は全体としてきわめて妥当な判断をしていると考えられるが、それでもPINの損傷については過失を認めた。教科書や論文に前述のような記載がある以上、それを遵守しなかった医療行為では過失と判定される可能性があることを肝に銘ずるべきである。

Joy の声（第７回）

大　泉　尚　美

整形外科北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター

関西医科大学総合医療センター　中村優子先生よりバトンをいただきました。子育てを終えた立場として、仕事との両立について自身の経験を振り返り、今思うことを書かせていただきます。

1992年に北海道大学医学部を卒業し、北大整形に入局しました。卒後6年目で上肢を専門に選んだ翌年に出産をし、産休後は半年程度週３日の勤務、出産の翌々年に入った大学院では夫の米国留学に伴い3年半の休職と大学院休学を経験しました。外科医としては、一度手術から離れると復帰が難しいのではと不安を抱かれる先生は多いと思います。私は計4年ほど手術どころか仕事自体から遠ざかっていたわけですが、その後も何とかキャリアを続けることができました。状況に応じた働き方（非常勤、当直免除など）をさせてもらいながらも学会活動は続けるよう指導していただいたことと、母と義母が全面的にサポートしてくれたことが大きく、その点は恵まれていたと思います。臨床に加えて学会活動を続けることは正直つらい時もありましたが、その後自分を支えて

上肢人工関節・内視鏡センター同僚の先生方と
（前列左より吉岡千佳先生、末永直樹先生、筆者、
後列左より朴木啓悟先生、久田幸由先生、松橋智弥先生、山根慎太郎先生）

くれる自信と財産になりました。さらに、上肢を専門に決めてからの出産であったため、大学院の研究は時間と場所の融通が利くテーマを選択できたこと、復帰に向けての知識のアップデートは専門領域に集中して行えたこと、局麻手術などから徐々に再開できたことも、キャリア中断後の復帰の助けになりました。一度習得した手術手技などは、復帰時に少しの時間とサポートがあればまたできるようになることを実体験からお伝えしたいと思います。また、ライフイベントのタイミングは人それぞれですが、なるべく早く専門性を持つことは一つの選択肢かと思います。

2012年、2013年に日本手外科学会の「女性手外科医のキャリア」に関するシンポジウムにシンポジスト、座長として参加させていただきましたが、その際の女性会員へのアンケートでは家庭を持ちながら研修や専門医取得に苦労されている多くの切実な声を聞きました。2021年度からは日整会の男女共同参画委員として活動していますが、いまだ出産・育児に関して苦労の声があり、10年経っても解決すべき課題は残っているのが現状です。一方で、今の若い世代は男性医師も育児を担いたいという希望があり、時代の変化を感じています。私自身を含めた指導者世代の意識改革と、女性医師だけではなく男性医師や出産・育児以外の一時離職者も含めての多様な働き方や復帰支援などが必要だと痛感しています。

育児をほぼ終えて今思うことは、そのあとも医師としての人生は続くということです。育児真っ最中で余裕がなくつらい、焦る思いをされている方も多いと思いますが、今できることをするだけでも助かる患者さんはいるということ、そして育児はいつかは終わり仕事に思い切り注力できる新たなステージが来るということをお伝えしたいと思います。ぜひキャリアを継続していけるよう応援しています。周囲の先生方も、育児を終えた医師が戻ってくることがひいては人的資源の充実につながるという視点でサポートして頂ければありがたいと思います。

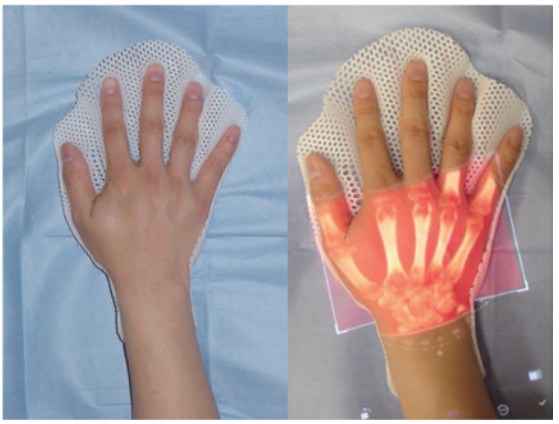
リレーエッセイ：技術紹介

プロジェクションマッピングによる手外科手術支援

赤　石　　渉
東京慈恵会医科大学 形成外科学講座

コンピュータシミュレーションはハードウェア、ソフトウェア、インターフェイス、ネットワークの発展に伴い、そのシステム形態によりVirtual Reality（VR;仮想現実）, Augmented Reality（AR;拡張現実）, Mixed Reality（MR;複合現実）,Substitutional Reality（SR;代替現実）といった様々な呼称が出現しており、現在はこれらを全て含めたものとしてExtended Reality（XR）と呼ばれ、定着しつつある。ARは、「現実世界にデジタル情報を付加することで現実世界を拡張認知可能とする」技術であると定義されている。大きく分けて、タブレット、スマートフォンなど、端末側にカメラとディスプレーが搭載され、カメラで撮影した現実世界の画像に、デジタル画像を液晶画面に重ね合わせ表示させるImage overlay型AR（ポケモンGoなど）と、プロジェクターを用いて現実世界側での投影面をインターフェイスとするProjection based ARいわゆるプロジェクションマッピングが知られる。

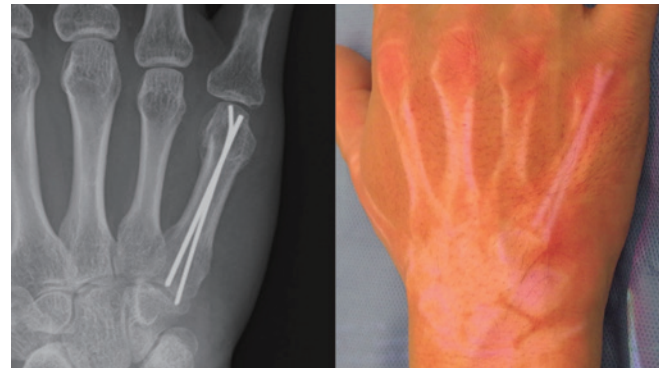
プロジェクションマッピングの医療への応用は、2010年のSugimotoらによる腹腔鏡手術の際に腹部表面に臓器を投影する報告が初出と言われている。腹部外科領域では本邦より報告が続き、2019年に三鷹光器より、肝切除に用いる、ICG蛍光造影画像を投影する医療用プロジェクター「MIPS」が発売されている。形成外科領域では腹部皮弁血管茎の描出に関して2013年の梅本らの雑誌形成外科の総説内に記載しているが、セッティングが煩雑で実用的ではないと評価している。続いて2014年にはSotsukaらはその方法を有用であるとして、英文誌に報告している。



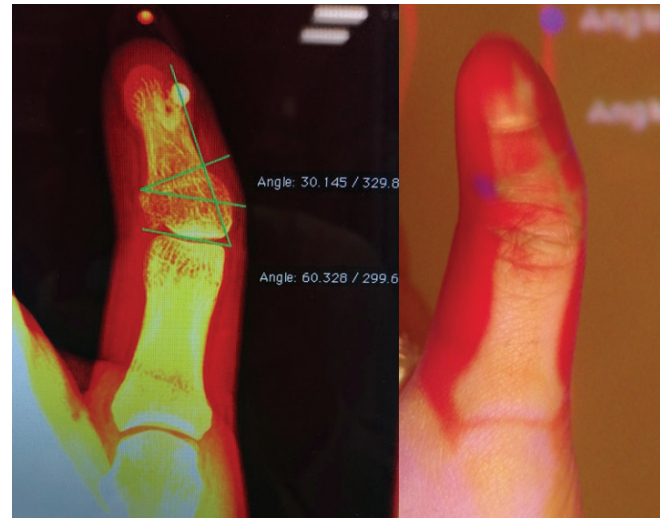
初期の予備実験においての手順を簡潔に説明する。まず手形を作成し、手の位置を固定した状態でCTを撮影した。こちらのDICOMデータをOsirixという編集ソフトでMIP法で再構成し、X線様の画像を作成し、Smart Beam Laser(SK-Telecom社)というポータブルレーザープロジェクターを使用して投影を行なった。
投影の際には手形に手を固定し、中手骨頭、橈尺骨茎上突起を投影基準として使用した。
実際には、X線画像を電子カルテの画面越しに撮影し、指位を大まかに合わせ投影するのみで十分実用に耐えうる。
Smart Beam Laserは大変優れたプロジェクターであったが、2023年３月現在終売となっている。

私が取り組んできたプロジェクションマッピングは、レントゲン、またはCTから再構成した画像を、体表より触れる解剖学

的ランドマークを基準点として投影するものである。現在のARの発展に比べると極めて原始的なものであるが、セッティングの簡便さというのは、まず外科医が使おうという気になる点で重要なポイントであると考えている。現在の構成では、精度も不十分であり、術中の構造物の変化に対応するリアルタイム性は有しないため、術前の評価のみへの利用に留まるが、今後の発展の余地は大いにあると考えられる。



第５中手骨骨折髄内釘術後内固定抜去



対立可能な三指節母指　矯正骨切りの角度決定と骨切りガイド線

プロジェクションマッピングのシステム全体の構成要素としては、投影するデジタル画像、デジタル画像を保存、補正処理するデバイス、プロジェクター、投影する対象、観察者となる。プロジェクションマッピングでは、本来深い部分に存在する解剖学的構造を体表面に投影表示するため、構造物が浮いているように感じる傾向にある。視点が移動しても像が変化しないことと、投影面が変形しても追従することがないことの2点がその原因と考えられる。観察者の視点の感知、体表変形の感知などを、カメラを通じて行い、それに合わせてソフトウェアでの補正を高速で行う技術が複数の企業、研究機関で開発が進んでいる。構成要素全体の発展が進むことで、最初は教育、患者説明、術前評価といったものから、次第に術中の操作に追従する、高精度のものへ、遠くない将来に社会実装が進むのではないだろうか。解剖が複雑で、かつ構造物が体表から近い領域に存在する手外科は、その利用価値が大きい分野であると考える。

国立成育医療研究センター整形外科

高　木　岳　彦

当センターは胎児期から思春期を経て成人期へと至るライフサイクルに生じる疾患（成育疾患）に関する医療（成育医療）と研究を推進しているナショナルセンターです。「良質な医療の提供」「成育医療に関する情報の発信」「志高く向上心を持った人材の育成」「質の高い臨床研究の推進」の4つを基本方針に掲げていますが、稀少疾患の小児患者にとっては最後の砦となり、こうしたお子さんやご家庭に適切な医療が提供できるよう日々技術の研鑽に勤しみながらその診療に尽力しています。

特に、小児手外科で取り扱う疾患は、子どもの成長に伴い自然に矯正される場合がある一方、成長とともに変形や機能障害が徐々に悪化することもあり、成長という要素を常に考慮して診療を行っています。

▶診療体制（外来）

初診外来は火・水曜日に交替で行っています。他の専門医の初・再診外来は他の曜日に行っていますが、病状によって専門性が高い場合、緊急性を要する場合は、医療連携室を経由して、紹介医から情報を得て専門医が個別に受け入れるようにしています。

▶診療体制（手術）

多くの四肢先天異常の手術に携わっており、その数だけでも年間250例以上と世界有数の手術数を誇っています。その種類は極めて多彩であり、多くの経験があるのが当科の特徴です。そのほか、救急診療科と協力して四肢の骨折などの外傷治療も行っていますが、上腕骨顆上骨折や外側顆骨折を始めとした肘周辺骨折を中心に上肢の外傷と内反肘変形などの後遺障害を扱っています。

▶カンファレンス

毎週、整形外科医師間で綿密なカンファレンスを行い、子どもの成長を念頭に置きながら、細かい手術方法のみならず適切な保存療法やリハビリテーションなども含めて、最善の治療戦略を計画しています。

▶海外留学医師の受け入れ

またもう一つの当科の特徴として海外留学医師を積極的に受け入れている点が挙げられます。グローバルな視点より、多様な価値観を認め合い、新たな風を取り入れるべく、海外臨床留学を積極的に受け入れる体制を整えてきました。まとまって小児の手外科を学びたい海外の医師は少なくなく、2019年頃より募集を開始したところ、コロナ禍による中断を経て、2023年1月の時点で2025年度まで研修が埋まってきている状況で20名程度待機してもらっている状況です。出身国も

台湾、マレーシア、ブラジル、スロバキア、インド、フィリピンと既に受け入れ、今後サウジアラビア、グアテマラ、香港、イタリア、エジプト、、、と続きます。海外留学医師には外来や手術、カンファレンスに参加し、学術論文や国際学会へも積極的に発表してもらっていますが、このような交流を通じて、当センターに勤務している医師にとっても学ぶことが非常に多いです。また同時に日本に学びに来てもらっている以上、彼らには有意義に過ごして欲しいため、日々研修システムの改良に努めています。

随時見学などは可能です。ご気軽に問い合わせ頂ければ嬉しいです。

国立成育医療研究センター 整形外科 診療部長
高　木　岳　彦
takagi-t@ncchd.go.jp

海外留学医師
（左よりBoris Dzula先生【スロバキア】、Mariana Almeida先生【ブラジル】、Sayantani Misra先生【インド】、高木）
（2022年9月21日、国立成育医療研究センター前にて）

認定施設紹介

埼玉慈恵病院　埼玉手外科マイクロサージャリー研究所

福　本　恵　三

当施設は前身の埼玉手外科研究所より所長の福本医師と副所長の小平医師が2019年より埼玉慈恵病院に移転し、あらたに埼玉手外科マイクロサージャリー研究所として立ち上げた施設です。2021年からは手外科専用の手術室、外来、リハビリ、検査室、マイクロサージャリートレーニング室を有する新棟が完成しました。手外科専用の手術室があるため緊急手術にも対応しやすい環境ですので、緊急の治療が必要な患者さんの受け入れを積極的に行っております。2019年より継時的に手術件数を増やしてきており、2022年度には1000件を超える見込みですが、年間2000件を目標にしています。

現在は手外科専門医3名（形成外科医2名、整形外科医１名）と手外科フェロー１名（形成外科医）の体制ですが、2023年4月からは新たに手外科専門医（形成外科医）１名と手外科フェロー（整形外科医）が加わる予定です。当施設の特徴は形成外科と整形外科の手外科専門医がいるところであり、フェローの先生は形成外科と整形外科のどちらの分野も学びながら診療できることです。手外科専門医になるには形成外科と整形外科の知識・技術が必要とされますが、この様な体制の施設は全国の手外科研修施設でも10施設ほどです。また、当院では福本医師の専門分野である先天異常の症例も経験出来ることも特色です。

フェローの先生は基本的には形成外科または整形外科の専門医取得後を条件とし、1年の研修を目安としておりますが長期または短期での研修も可能です。研修期間は主治医として積極的に治療に関わってもらっています。これまでのフェローの先生方は整形外科医1名（1年研修）、形成外科医2名（1年半研修、3年研修）の3名ですが、変性疾患をはじめとして、肘関節から手指までの骨折、腱損傷や、軟部組織損傷に対するマイクロサージャリー手術などを各々の経験に応じて専門医の指導のもと治療を行ってきました。形成外科の先生で肘関節や手関節の骨折などを経験することはあまりないでしょうし、整形外科の先生は施設の体制によってはマイクロサージャリーを要する緊急手術を行う経験が中々得られないこともあると思いますが、当施設ではバランスの取れた症例の経験が可能です。

また、週2回にリハビリスタッフとカンファレンスを行っており、治療方針や術前計画、術中所見から後療法を確認しています。理学所見と画像・生理機能検査から得られた診断のもとに手術のみならず後療法を含め、一貫して適切な治療が行える様に議論しております。学術的には抄読会を行い最新の知見を得ると共に、学会・論文発表も積極的に行ってもらっています。2022年にはフィリピンから整形外科医が短期研修にきており、2023年度にも3名研修予定ですが、彼らと英語でディスカッションすることで私達の勉強にもなっております。フェローということで金銭的な面に関して気になると思いますが、当施設では病院の職員としての給与や交通費を保証致します。質問などありましたら当施設のホームページの手外科研修の欄より福本医師の連絡先がありますのでお問合せください。また、フェローの先生の研修体験記も載っておりますので参考にしてみてください。

岡田恭彰　記

独立行政法人 地域医療機能推進機構 佐賀中部病院 整形外科

園畑素樹

平成26年、社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院の3つの団体が1つになり、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO、ジェイコー）が発足しました。全国に57病院あります。佐賀社会保険病院であった当院はJCHO佐賀中部病院となりました。

当院は佐賀市に立地する病床数160床の二次救急病院です。整形外科は常勤医６名と非常勤１名計７名で構成され、そのうち手外科指導医２名、手外科専門医１名が在籍しています。

その他の診療科は、内科（消化器、呼吸器、循環器、脳神経、血液腫瘍、糖尿病（非常勤））、消化器外科、婦人科、眼科、放射線科、麻酔科（非常勤）、形成外科（非常勤）となっています。術前後の全身管理についても、快く相談に乗ってもらえるオープンな雰囲気の医局です。

昨年度の整形外科の総手術件数は約900件あり、そのうち手外科関連手術は500件を超えています。症例は外傷から変性疾患まで多岐にわたり、マイクロサージャリーや手関節鏡も行っています。術前カンファレンス、術後カンファレンス、リハビリスタッフを含めた病棟回診、外来診療などを通して、手外科スペシャリストによる熱意のこもった指導が受けられます。

当院では、研究会・学会への参加や発表を積極的に行っており、若手医師への丁寧な指導を信条としています。また、和文、英文問わず論文作成指導も積極的に行っています。

当院外観

本原稿執筆時（2023年２月）、院長、副院長が整形外科医であるためか、整形外科にとってはさまざまな面で働きやすい病院ではないかと思います（依怙贔屓はないですが）。

JR佐賀駅より車で約５分の距離の立地しているため、交通の便がよく研修には好都合の条件がそろっています。街中に近いため、若手医師は仕事だけでなくアフターファイブも充実した日々を過ごしています（COVID19のため、ここ数年は自粛してもらっています）。オンオフをきちんと分けることにより、より充実した手外科医としての仕事ができると考えています。

短期、長期にかかわらず見学、研修、勤務をご希望の先生を歓迎します。

当院に少しでも興味があれば気軽にご連絡いただければと思います。宜しくお願い致します。

独立行政法人 地域医療機能推進機構 佐賀中部病院
〒849-8522　佐賀県佐賀市兵庫南３丁目8-1
電 話　0952-28-5311
FAX　0952-29-4009

整形外科スタッフ

札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター

倉田佳明

札幌徳洲会病院は、約200万人の人口を抱える札幌市に1983年に設立され、以来、当地域の地域医療・救急医療の中心的役割を担ってきました。2007年には一般整形外科に加え、四肢外傷治療に特化した整形外科外傷センター（以下、外傷センター）が開設されました。外傷センターでは、一般的な骨折の治療はもちろん、他施設では治療の難しい重度四肢外傷（重度開放骨折）、関節内骨折、切断指（肢）などの治療を行っています。

現在、外傷センターには手外科専門医が3名います。一般整形外科には手外科医が在籍していないため、手の変性疾患等も外傷センターに依頼され診療していますが、当院の手外科領域の症例は、その多くが外傷症例です。骨折、腱損傷、神経・血管損傷だけでなく、切断指、mangled hand、各種皮弁といった手術等も積極的に行っています。多くの施設では、重度開放骨折に対し、骨折は整形外科医、軟部組織再建は形成外科医が分担して治療にあたることが多いと思います。しかし当センターではorthoplastic surgeonとして、骨折も軟部組織再建も、一貫して当センターの医師が治療を担当するのが特徴です。一例として、前腕のGustilo 3Bの開放骨折に対して遊離皮弁術を施行した症例を提示します。

外傷を中心に手外科研修を考えている方、マイクロサージャリーに興味がある方、経験を積んでステップアップを考えている方、見学等も大歓迎ですので、お気軽にお問い合わせ下さい。

症例の紹介

A

40代女性、撹拌機に前腕を巻き込まれて受傷した。屈筋群、伸筋群の損傷を伴う前腕両骨のGustilo 3Bの開放骨折であった。

B

デブリドマンと骨の仮固定を行った後、受傷後３日目にプレートによる確定的内固定、筋・腱修復、皮膚欠損に対する遊離前外側大腿皮弁を施行した。

C

最終診察時、指の拘縮はやや残っているものの、概ね良好な機能回復を得られている。

山王病院整形外科

中　村　俊　康

山王病院は東京都港区の青山一丁目駅および乃木坂駅から徒歩５分、赤坂見附、六本木も徒歩圏内で、東京のど真ん中にあります。病床数は78で、全室個室の病院です。産科が特に有名で東京のお産御三家の一つになります。当院は国際医療福祉大学の関連施設ですが、他の関連施設との人事交流は少なく、整形外科は常勤医師５名、非常勤医師２名の体制が継続しています。

手外科の診療は指導医・専門医の私、中村俊康と片山医師が担当しています。外来は月曜午前と木曜全日で、手外科関係の手術は年間約250例、そのほとんどがTFCC損傷、橈骨遠位端関節内骨折や母指CM関節の鏡視下形成術で、さらに肘関節鏡視下手術も行っていて、関節鏡関係の手術器械はほぼ取り揃えてあります。手術日は月曜午後、火曜午前（外傷枠）、水曜全日で、火曜の午後には手関節造影検査を行っています。私の専門が手関節疾患、特にTFCC損傷のため、TFCC損傷の患者さんは当院が交通至便のためか北は北海道から南は沖縄まで、すべての都道府県から患者さんがいらっしゃいます。

手外科研修施設には私が慶應から赴任した2014年からなっています。当院での研修では手外科一

山王病院外観

般の診療と治療手技の習得を第１目標とし、手関節や肘関節の骨折治療や偽関節治療を第２目標に、手関節鏡、肘関節鏡を中心とした最小侵襲な手術手技の獲得を最終目標に置いています。最終目標に到達するには最低１年間の研修が必要と思いますが、症例数が多いため、十分に到達可能と思います。１年を超えた研修も可能ですし、３か月間や６か月間の短期研修や手術見学も随時受け付けています（１年以上の研修の場合、有給となります）。

コロナ禍の2020年以前は国内はもちろん、ドイツ、ノルウェー、英国、米国、カナダ、オーストラリア、シンガポール、香港、韓国、タイ、マレーシアなどから手術見学がありました。コロナ禍の期間中の外国人医師の手術見学の受け入れはありませんでしたが、入国規制が緩和された2022年の10月からはすでに韓国、オーストラリア、タイからの手術見学者が来ています。研修期間中にこれらの外国人医師との交流ができ、場合により将来の留学先の開拓につながるのも本院の魅力と思います。

国際医療福祉大学臨床医学研究センター山王病院整形外科部長
連絡先　東京都港区赤坂8-10-16 山王病院整形外科
電 話　03-3402-3151
E-mail：toshiyasu@ae.em-net.ne.jp

名古屋掖済会病院　整形外科・手外科 / 手外科・マイクロサージャリーセンター

太田英之
藤原祐樹
丹羽智史

当院は、名古屋市の南西部に位置する602床の3次救急医療施設です。救命救急センターを有し、年間1万台以上の救急車を受入れています。

下記の診療体制でやっておりますが、手に限らず外傷症例が多いのが特徴です。

固有指レベルの切断症例だけで年間平均110件程度、再接着が年間平均20件程度あります。切断指以外の重度四肢外傷も上肢下肢含め年間平均20件前後と近隣自治体からの搬送も多く、愛知県内では最多の件数を受け入れております。症例は豊富ですし、後療法まで含めて、長年当院で蓄積された多くのノウハウを学ぶことができます。ご興味のある方はぜひお問い合わせください。

診療体制

- 当科開設53年
- 現在常勤医師13名、うち、整形外科専門医８名、手外科専門医２名
- 年間手術件数　平均2200件程度
- 常勤正職員として雇用、年次に応じた給与形態と福利厚生
- 術者として執刀可能
- 研修期間は半年から数年単位で調整可能
- リハビリテーション部門には、認定ハンドセラピストを含む４名の専従ハンドセラピストが在籍しており、担当医と密に連携し、専門性の高いハンドセラピィを提供
- 外来、手術症例を担当するにあたり、手外科・手外傷中心か、整形外科全般か、など業務内容も調整可能

担当者：太田英之　ootahi@ekisai.or.jp
名古屋掖済会病院HP　https://www.nagoya-ekisaikaihosp.jp/

外傷を中心に手外科研修を考えている方、マイクロサージャリーに興味がある方、経験を積んでステップアップを考えている方、見学等も大歓迎ですので、お気軽にお問い合わせ下さい。

八尾徳州会総合病院　整形外科

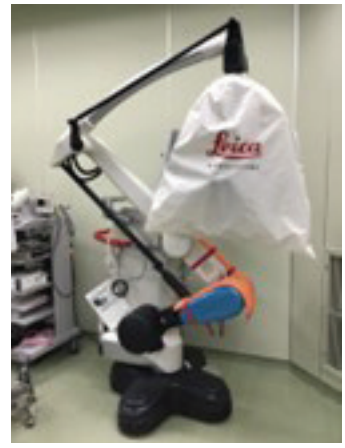
土　肥　義　浩

当院は大阪の郊外に位置する救急医療を中心とした徳州会グループの415床の総合病院です。2009年に新築移転しておりまだ新しく綺麗な施設です。診断装置も320列マルチスライスCT、3テスラを含めた３台の MRIを備え、最大18MHzの表在エコーも外来や手術室に備え診療に活用しています。また手術室にはマイクロ顕微鏡や最新32inch４K vision の関節鏡装置を導入しています。これらを活用して手関節鏡や、鏡視下手根管症開放術、エコーガイド下手術も積極的に行っており、特に手関節鏡に関しては学会等で多数の実績を報告しています。

手外科については2018年から整形外科で専門外来を開始し翌年に専門医研修施設に認定された新しい研修施設になります。症例は多く昨年の手外科手術の実績は全身麻酔の98件とその他麻酔の152件と研修施設として十分な数が確保されています。また病院のある八尾や近隣の東大阪は町工場が多くスポーツも盛んな土地柄で手の外傷も多くあります。労働者やスポーツ選手の早期回復や現場復帰に向けて患者と一緒に取り組む治療はやりがいのある仕事の一つになっています。

教育に関しては作業療法士も含め週一回のカンファレンスと月一回の勉強会を行なっています。当院では１人で多くの症例を経験できますが知識の整理や手技の向上には経験則だけでなく学術参加も重要になります。昨年はアメリカ手外科学会のポスターと国内学会のシンポジウムを含む9件の手外科の学会発表を行い、また開設以来の４年間では３件の手外科論文を上梓しており専門医取得に必要な学術の体制も整えています。

18MHz表在エコー



Leica社製手術用顕微鏡

４K vision関節鏡装置

その他の特徴として当院は特定の大学関連施設ではないことから医師の一般採用をしています。そのため人事や移動等での研修の中断の心配をする必要がありません。また当院は全国にある徳州会病院の中でも整形外科専門医の取得が可能な数少ない施設です。大学やその関連施設以外の研修施設で整形外科から手外科まで一貫した専門医研修ができる貴重な施設となっています。

手外科は局所に限局した医療ですが、その中で骨関節や、神経血管まで含む軟部組織、リウマチ等の炎症性疾患までを扱う多様性のある分野です。多彩な疾患や治療手技はそれぞれにlogicalで深みがあり飽きることがありません。当院で一緒に働きながらこの面白い手の外科学の研鑽を積むことができればと考えています。

委員会報告

■常設委員会

財務委員会

担当理事　西　田　圭一郎
委員長　三　浦　俊　樹

2022年度財務委員会は第1回を3月8日に、第2回を12月13日に開催しました。

第1回は、メンバーとして担当理事 岩崎倫政先生（北海道大学）、委員長 山本真一先生（横浜労災病院）、委員 金潤壽先生（太田総合病院）、富田一誠先生（國學院大学）、若林良明先生（横浜市立みなと赤十字病院）、三浦俊樹（JR東京総合病院）、事務局は広野・中原氏（アイ・エス・エス）で構成され、会議室とweb併用にて行われました。

第1回委員会では2021年度収支決算および2022年度予算案を審議し理事会へ提出し、4月13日の代議員総会にて承認されました。

2021年度収支決算では、収入は専門医審査認定収入、会費収入、第64回学術集会の収益等が増え予算額に対して合計約4313万円増となりました。支出は、学術振興活動費や事務委託費が増加しましたがweb利用による会議費の減少等を併せて予算額に対して合計約398万円増にとどまりました。なお、2021年度の租税公課・法人税等は約753万円でした。これらにより、2021年度収支は約109万円の赤字予算が約3551万円の黒字決算となり、正味財産残高は約2億3831万円となりました。

第2回委員会からは若林先生と三浦以外のメンバーが交代となりました。新らたに担当理事 西田圭一郎先生（岡山大学）、委員に小寺訓江先生（日本医科大学）、柳林聡先生（新東京病院）、吉田進二先生（東海大学）が加わり、委員長は三浦となり12月13日に委員会がweb開催されました。

第2回委員会では2022年度収支状況（10月まで）の確認、2023年度予算案の審議が行われました。

2022年度の収支状況では、新型コロナウイルス感染拡大に伴うカダバーワークショップの中止、専門医試験のWeb化に伴う専門医試験費用の出費、第64回学術集会余剰金を元にした長崎大学への寄附等の状況が報告されました。

2023年度予算案は各委員会からの予算書、第66回学術集会収支予算案等を元に審議・作成されました。支出として従来事業ではHand surgery購読料値上げ等の影響がでています。新規事業では認定施設管理構築費（単年度支出）、ハンドの日の広報活動費用、新規国際交流費用等が計上されました。すべての事業が行われるとすると、約1170万円の赤字となる見込みです。

各委員会にはweb開催等により経費削減へご協力いただいておりますが、今後は社会経済活動の活発化、諸費用の値上げに伴って事業費が増加することが見込まれます。日手会が健全な財務運営を続けるため、引き続き会員の皆様のご理解・ご協力を宜しくお願いいたします。

緊急事態対応委員会

担当理事　**西　田　圭一郎**

緊急事態対応委員会は、各委員会の枠組みを超えて、突発的な事態に対して迅速な対応・判断を行う委員会で、下記のメンバーで活動しております。

委　　員：小寺訓江、三浦俊樹、柳林聡、吉田進二、若林良明
オブザーバー：酒井昭典、佐藤和毅、面川庄平、三上容司

前回のニュースレター後、委員会としての活動はありませんでした。今回は「学術集会次々期会長選挙に関する規定」の改正についてご報告いたします。本件は岩崎理事長のご要望を受けて、担当理事が対応しました。まず、立候補届（あるいは推薦書および承諾書）の様式をより詳細なものに改変しました。また、学術集会次々期会長選挙の公示は例年12月に行われます。現在の規定では立候補または推薦の締め切りは3月20日とされており、公示から立候補期間（開始から締め切り）が長く、さらに約1週後の理事会で決定していました。改正案では1月末を締め切りとし、1か月の辞退期間を設けて、その後立候補届（あるいは推薦書および承諾書）一式（略歴や抱負などを記載）を代議員の先生方に配布することとしています。選挙となった場合は原則として4月の代議員会で出席者のみによる投票を行うとしていますが、コロナ感染症の拡大や広域災害等でofficialに参加できない場合も想定し、「社会状況等に応じて不在者投票を認める場合もある」を付記いたしました。また、「学術集会会長選挙管理委員会」を新たに設置する必要がありますが、選挙管理委員会については細則に規定があり、急遽必要になった場合、理事長が6名を氏名して委員会を組織することになっております。附則では「この規程の変更は，総会における承認等を必要とする第2条の規定を除いて，理事会において行う」となっており、改正案は理事会にてメール審議し承認されました。立候補（推薦）に必要な新しい様式は会員マイページの「学術集会会長選挙公示」からダウンロードできますのでご確認ください。

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担当理事　**村　瀬　　剛**
委員長　**山　本　美知郎**

2022年度のメンバーは担当理事と委員長のほか小笹泰宏先生、小野真平先生、児玉成人先生、斉藤太一先生、多田薫先生、辻井雅也先生、中川泰伸先生、中山政憲先生、辻英樹先生、原章先生、今田英明先生、竹内実知子先生、そしてアドバイザーが内藤聖人先生です。

2022年度は8月に札幌医大にてカダバーワークショップを予定していたため、2021年11月から

小笹先生を中心に打ち合わせを開始しました。委員会全体としては2022年6月6日に第1回ウエブ会議を開催し、カダバーワークショップの打ち合わせとオンライン教育研修会講師の選定とオンラインマガジン「HandNow」のupdateに関し議論しました。その後は各委員とのメール審議を行い、7月6日に第2回ウエブ会議で特にカダバーワークショップの内容について詳細を確認しました。その後、COVID-19第7波によってカダバーワークショップを中止せざるを得ない状況に至り、参加を予定していた先生方には大変なご迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。しかしながら、対面でのカダバーワークショップの参加希望者が多く、この活動に期待している先生方の存在が確認できたため、今回の反省を生かしつつ2023年度の夏にあらためてカダバーワークショップを企画しています。参加を希望される先生方にとって有益な内容となるよう委員会として準備いたします。

オンライン教育研修会については、前回のアンケートと委員会内での議論に基づいて開催方式を決めています。対面での教育研修会を希望される意見もありましたが、COVID-19の収束が見通せていない現状を鑑みて、2022年度も2023年1月20日から3月20日までオンラインでの教育研修会を企画しました。講師の先生方の力作揃いであり、会員にとって非常に有益な内容であると期待しています。2023年度の教育研修会についても会場を確保する場合は既に準備が必要なため、現時点でオンライン開催と決めています。自分の都合のいい時間に何回も視聴できるオンライン教育研修会は、メリットが多くポストコロナでも有効かもしれません。会員の皆様のご意見を参考に、2024年度以降は次代の委員会が決めることになると思います。

HandNowのコンテンツについても委員会内で議論しアップデートしています。「backstories」は2022年度から学術集会で優秀演題に選ばれたものを取り上げています。研究の背景や苦労話などは学会員に有益と考えています。「Q&A」は日本手外科学会誌の総説からの問題を載せています。これは編集・用語委員会および専門医試験委員会とも連動しており手外科専門医試験を受験する先生方に役立つと考えています。「オンラインレクチャー」はオンライン教育研修会の論文レビューコーナーを再掲載しています。エビデンスを重視した講演を繰り返し視聴できる機会になっています。「自由投稿動画」も募集しています。投稿いただいた動画は委員会にて査読しておりますので、投稿規定を参考にご応募いただければ幸いです。今後とも会員の皆様のお力添えをお願い申し上げます。

編集・用語委員会

担当理事　**池　口　良　輔**
委員長　**小　田　　良**

2022年度の編集・用語委員会は、担当理事が面川 庄平（以下敬称略）から池口良輔に交代し、アドバイザーには河村健二に残っていただき、委員長は小田 良が担当しています。26名の委員は、石河 利広、入江 徹、恵木 丈、大井 宏之、織田 崇、河村 太介、金城 政樹、栗山 幸治、小林 由香、坂本 相哲、佐々木 裕美、佐竹 寛史、篠原 孝明、頭川 峰志、園畑 素樹、長尾 聡哉、藤巻 亮二、松末 武雄、山部 英行が昨年度からの継続で、新たに小薗 直哉、高松 聖仁、辻本 律、土田 真嗣、那須 義久、松井 雄一郎、松末 武雄が加わって活動しています。

2022年度の編集・用語委員会の主たる活動内容は、日本手外科学会雑誌（第39巻）の発行と第6回日本手外科学会奨励賞（田島達也賞・津下健哉賞）の審査・選定です。本年度もCOVID-19の状況から、すべてweb会議により委員会を開催いたしました。日手外会誌第39巻では引き続き総説を各号に2編ずつ掲載しております。総説のテーマは、手外科専門医研修のカリキュラムから選定し、同時に掲載される学術論文・自由投稿論文とともに手外科医を目指す多くの先生方に読んでいただけるように、各分野で活躍されている先生方に執筆を依頼しております。総説にはそれぞれ設問を2問用意し、専門医試験委員会で査読いただいたうえで掲載しております。総説のテーマに関する知識整理や専門医試験にお役立てください。総説執筆を担当していただいた先生方とその査読を担当していただいた先生方におかれましては、日常診療でご多忙にもかかわらず快く引き受けていただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

本年度も日本手外科学会雑誌の質の向上を目指す理事会の方針から、論文の新規性を重要視して査読を厳正に行っております。2023年1月現在、2022年度の論文投稿総数は272編で、採用210編、不採用47編、審査中15編と採用率は77％でした。教育的な観点からも査読による改訂を重視し、さらに不採用となった論文に対しては、今後の研究につながるような査読コメントを心がけております。不採用であってもぜひ研究を継続していただき、データを積み重ねて共著者と充分に推敲した上で自由投稿論文として再投稿していただきたいと思います。

第6回日本手外科学会奨励賞（田島達也賞・津下健哉賞）については、公募の中から2名の候補者を編集委員会で選定し、理事会承認を得て、田島達也賞は松村昇先生（慶應義塾大学　整形外科）、津下健哉賞は山本耕平先生（東住吉森本病院　整形外科）に決定しました。両先生は2023年4月20日－21日に開催される第66回学術集会総会で表彰される予定です。

さらに当委員会では必要に応じて手外科用語に関する改変をおこない、会員ホームページに手外科用語集を掲載しております。

また、本年度は理事会から「日手会誌の投稿についてのコンテンツ」を編集・用語委員会で作成する旨の依頼がありました。会員に論文作成と投稿規定の注意点などを呈示することを目的として動画を作成し、日手会のホームページに掲載する予定です。

課題としては、現在の投稿・査読システムがかなり古くなっており、一連の作業に無駄な労力が多いこと、正確性に欠けることが挙げられます。投稿時のCOI開示と電子ジャーナルの発刊方法も含めて、システムの大幅な改修について今後議論を重ねていく必要があります。

本年度の第39巻は、2号が2022年11月28日、3号: 12月26日、4号: 2023年1月30日に発刊され、以降5号: 2月27日、6号: 4月10日発刊予定です。遅滞なく発刊するためには、代議員の先生方の期日内の査読が不可欠です。編集委員一同もより一層の努力をしてまいりますので、今後ともご協力のほどお願い申し上げます。また会員の皆様におかれましては、引き続きご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事　**村　瀬　　剛**
委員長　**金　内　ゆみ子**

2022年度の機能評価委員会は、昨年度と同様のメンバーで、担当理事は村瀬剛先生、委員は西脇正夫先生、阿久津祐子先生、志村治彦先生、飯塚照史先生、茶木正樹先生、小田桐正博先生、金内という構成です。活動方針も同様で、継続事業の整理と推進、日本ハンドセラピイ学会（日ハ会）との連携、有効性・妥当性が検証され世界的に使用される評価方法の日本語版の開発を目標としています。

活動内容　3ヶ月毎のWeb会議とメール審議を継続しています。

Ⅰ. 握力計測マニュアル（Jamar型握力計）

アメリカハンドセラピィ学会の推奨するマニュアル（Jamar型握力計を使用、握り幅はポジション2、座位・肘屈曲位で3回測定した平均値を代表値とする）をもとに日ハ会が発行したマニュアルを、当委員会において問題点などを文献的に検討した改定版を作成しました。この改訂版を「日本手外科学会（日手会）監修」とし、日ハ会HPに改訂版が掲載後、2023年春に日手会HPにリンクされる予定です。

Ⅱ. 握力実態調査

握力値は測定方法により異なりますが、測定方法は統一されておらず、握力測定の実情を踏まえ今後のマニュアル作成や研究方針につなげる目的で、2022年春に日手会会員に対しWebアンケート調査を実施しました。皆様のご協力を賜り、660名より回答（回答率18.4%）をいただき、多くの会員が「Smedley式握力計を使用し、握り幅は被検者により毎回異なり、立位か座位の肘伸展位で、1回測定値を代表値とする」ことが判明しました。詳細な結果は、日手会会員HPに掲載中です。妥当性・信頼性・再現性があり、実用的な握力測定方法の基準の作成を検討中です。

Ⅲ. デジタル角度計の研究

デジタル角度計について、検者内・検者間誤差などをさらに検証するため、３D立体造形モデルを用いた研究モデルを作成し、機能評価委員の各施設が協力し多施設研究を施行しました。検証結果は、第66回学術集会で報告させていただく予定です。

Ⅳ. ROM測定

前腕での回内外測定方法と、母指CM関節の測定方法については、議論があります。特に回内外の測定は、日本整形外科学会は手掌面、日ハ会は手関節レベルでの測定を基準とし、異なる測定方法を推奨しています。ROM測定の実情を踏まえ今後の研究方針につなげる目的で、日手会会員を対象に、Webアンケート調査を検討中です。

よりよい治療方針や成績の獲得には、正確な機能評価が不可欠とされますが、難題が山積しています。多角的視野を持ち多分野の方々と連携し、優れた評価方法の開発を目指すことが大切と思われます。今後とも会員の皆様のお力添えをお願い申し上げます。

国際委員会

担当理事　**池　上　博　泰**
委員長　**市　原　理　司**

国際委員会は池上博泰担当理事、市原理司委員長のもと、2022年12月までは秋田鐘弼、岩本卓士、川崎恵吉、善家雄吉、多田薫、中島祐子、藤尾圭司、森崎裕の委員と柿木良介、金谷文則、中村俊康、村田景一のアドバイザーから構成されていました（五十音順、敬称略）。その後、岩崎理事長へJSSHの国際的プレゼンスを高めるために必要な増員を依頼し理事会での承認を得て、2023年1月からは宇佐美聡先生、長尾聡哉先生が新たに加わって総勢16名となりました。

トラベリングフェロー関連

コロナ禍で中止となっていたJSSH-ASSH, Asianトラベリングフェローが再開となり、2023年度トラベリングフェローの選考を行いました。JSSH-ASSHトラベリングフェローとして兒玉祥先生、丸山真博先生の2名を、Asian exchangeトラベリングフェローとして野口貴志先生（香港）、木村洋朗先生（台湾）、菅沼省吾先生（韓国）の3名を選出しました。選出されたフェローの先生方には、是非積極的に各国のフェローと交流して、コロナで失われた3年間からの脱却が図れる様に頑張って欲しいと思います。また、2023年から英国手外科学会（BSSH）への2名のトラベリングフェローの派遣が、APFSSH所属のsocietyから選出されることとなり、こちらに関しても新たに募集要項を作成し選考していく予定です。

Asian Pacific Pioneer of Hand Surgery1986-2023記念誌への寄稿依頼

2023年APFSSH（シンガポール）の開催に合わせて、IFSSHからPioneer of Hand Surgery1986-2023に選ばれているアジアの先生方のことを紹介する記念誌の刊行が予定されました。JSSHから選ばれている17名のPioneerの先生方の記事に関して、所属施設や関連施設に記念誌への寄稿をお願いし、無事に期限内にAPFSSHへの投稿を終えました。

American Association for Hand Surgery（AAHS）への招待国としての参加

2023年1月17-21日に米国フロリダ州マイアミで開催されたAAHSは、JSSHがguest societyでした。19日の朝に開催されたセレモニーでは、岩崎理事長の代理として国際委員会委員長の市原理司が招待国としての挨拶を行いました。JSSHからも約30名の先生が参加して、Instructional course lectureやOral presentationで素晴らしい研究内容の講演で学会を盛り上げていただきました。3日目の夜にマイアミビーチ沿いのレストランで開催された会長招宴には、多くのJSSHメンバーが招待され、米国手外科学会の先生方との親睦を深めました。

JSSHの国際的プレゼンス向上のための取り組み

JSSHの国際的プレゼンス向上のために、国際委員会では多くのことに取り組んでいます。その一つとしてIFSSH, APFSSHにおけるJSSHの存在を確固たるものにするために、世界各国のKey Personとなる先生を日本手外科学術集会へ招聘することを予定しています。また国際化を進めるた

めに、若いJSSH会員の先生方にはASSH, FESSH, APFSSHといった国際学会へ積極的に参加して欲しいと考えています。そのためにも国際委員会として様々な支援を検討しておりますので、奮って抄録を登録して参加をお願いします。

広報渉外委員会

担当理事　**古　川　洋　志**
委員長　**寺　本　憲市郎**

令和4年度の広報渉外委員会はWeb会議での開催となりました。

古川洋志理事　岸陽子アドバイザー　金谷耕平先生　佐藤光太朗先生　堂後隆彦先生（新）

中川夏子先生　原友紀先生　寺本で活動しております。

主な取り組みは1）日手会ニュースの発行　2）手外科シリーズの新規作成、見直し　3）ホームページの改訂　4）日整会シンポジウムへの提言です。

まず、日手会ニュース第44号より7年計10回にわたり御執筆いただいた上羽先生の「手外科温故知新」が日手会ホームページ上に常置されいつでも拝読できるようになりました。是非今後も手外科医の指標としていただければと思います。

本年度も病院の広報などの目的で、手外科シリーズの使用許諾依頼がありますが、著作権は日手会にあるため、広報渉外委員会がその都度使用条件を確認し判断しております。

また定期的に手外科シリーズの改編を行っておりますが今回は以下について検討いたしました。

No22.23　リウマチによる手の障害

No24.母指MP関節靭帯損傷

No.25合指症

日手会ニュースは2022年9月に号外号が発刊され2023年3月には57号が発行される予定です。57号より新しく認定施設紹介を行います。日手会に登録認定施設は非常に多く、研修受け入れ可能を標榜する病院より募集させていただきます。ぜひ多くの施設にご投稿いただければ幸いです。またリレーエッセイ形式の新しい技術の紹介を開始します。

ホームページ関連では、キャリアアップ委員会より、日手会ホームページ上にキャリアアップ相談窓口を設置する予定です。ぜひご活用ください

ハンドの日（8月10日）の取り組みとして

産経新聞（全国版）テレビ面広告と、朝日新聞西部紙面の医療特集で「手外科」をテーマとした一般読者への健康情報の依頼に対して副島修先生よりご執筆いただきました。

第97回日整会シンポジウム推薦は、

「術後長期経過例から学ぶ」

「手外科領域における人工知能と深層学習の活用」の2題を推薦しております。

第31回日本医学会総会での分科会/加盟展示の依頼がありました。

今回は、一般市民にむけ企業とともに手外科を考え、日本手外科学会HPの存在を広く認知してもらうために岸アドバイザーより第1回日本手外科学会オンラインフォーラムの内容をもとにポスターを作製し提出しております。

社会保険等委員会

担当理事　**田　尻　康　人**
委員長　**岡　﨑　真　人**

令和4年度社会保険等委員会は、田尻康人担当理事の下、鈴木拓、瀧上秀威、建部将広、藤田浩二、普天間朝上、松浦愼太郎（50音順、敬称略）と委員長の岡崎真人の計8名で活動を行っております。社会保険等委員会の活動としては、外科系学会社会保険委員会連合（外保連）の手術、実務、麻酔、処置、検査各委員会へ委員を派遣し外保連活動への協力を行うこと、2年ごとに行われる診療報酬改定に対して新規申請ならびに改定の学会要望を提出すること、および診療報酬改定に関する情報を学会会員と共有することなどを事業として行っております。直近の事業内容および今後の予定について、ご報告申し上げます。

A. 会議日程

第1回：令和4年6月28日（web会議）
第2回：令和4年10月15日（web会議）
第3回：令和5年2月11日（web会議）
このほか、適宜メール審議を行っております。

B. 令和6年度診療報酬改定の提案

① 手術14通則へのK059-2関節鏡下自家骨軟骨移植術の追加（日本整形外科学会との共同提案）
K059-2関節鏡下自家骨軟骨移植術は手術通則14に記載されておらず、同一術野または同一病巣につき、2以上の手術を同時に行なった場合、主たる手術の所定点数しか算定できない可能性があります。

② 複雑な腱手術に対する入院外加算
Wide awake surgeryの有用性が報告されています。特に腱剥離術、腱移行術、腱移植術での手術成績の向上が期待できますが、出血コントロールなど術者としての難易度は上がることは否めません。保険審査員にとって麻酔法の判別が困難あるいは煩雑となる可能性があり、入院の有無で区別せざるを得ないと判断しました。

③ K098 手掌屈筋腱縫合術の廃止（日本整形外科勤務医会との共同提案）
K098 手掌屈筋腱縫合術は手術通則14の「指に係る同一術野」、同一手術での複数手術の特例に該当する術式ではなく、（前腕から手根部における）複数腱縫合加算も算定できません。汎用性も診療報酬点数もより高いK037 腱縫合術で代用可能と判断しました。

新規医療技術の申請には、エビデンスやガイドラインによる有効性の証明、実診療での実績が求められる様になっております。

外保連への要望書作成にあたり、代議員の皆様には①および②に関してアンケートをお願いすることとなりました。お忙しいと存じますが、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

C.学術集会におけるランチョンセミナー

公正競争規約遵守のため、第65回学術集会では保険診療に関するセミナーは開催できませんでした。今後もスポンサードセミナーとしての開催は困難と思われます。第66回学術集会では教育研修講演「手外科と保険診療アップデート」として、社会保険診療報酬支払基金の佐々木孝先生が保険審査の立場から、当委員会が手外科学会の立場から30分ずつ講演する機会をいただきました。今後は手外科学会の委員会活動の一環として保険診療に関するセミナー開催を行うことを検討しております。

D.外保連活動

「整形外科領域のKコードを部位別に見直す検討会議」が発足し、日手会社保委員会からは建部先生にご担当いただくことになりました。

今後も会員の皆様からの保険診療に関してご要望がある場合には、対応可能か検討させていただきますので、ご意見を頂戴できればと思っております。

先天異常委員会

担当理事　**福　本　恵　三**
委員長　**齊　藤　　晋**

先天異常委員会の主な活動は、手の先天異常懇話会の開催、日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討、手の先天異常症例相談窓口の運営などがあります。本委員会活動により日手会員の先天異常手診療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

【症例検討会の復活へ：手の先天異常懇話会】

第65回学術集会期間中の2022年4月24日に第60回手の先天異常懇話会を開催しました。近年、日整会単位取得への配慮から1時間全てを講演に当てていましたが、第60回手の先天異常懇話会については30分の講演と30分の症例検討から構成されるハイブリッド形式とさせて頂きました。今回は橈側列形成障害を主題とし、国立成育医療研究センター高木岳彦先生により「橈側列形成障害　～病態と治療法、今後の展望について～」をご講演頂きました。疫学・診断・Bayne分類・装具療法・手術（中心化・橈側化・第2MTP関節移植術）などを、貴重な症例資料とともにご教授頂きました。講演の後には橈側列形成障害の症例検討を行い、参加者の間で活発な議論を交わすことができました。少子化により手の先天異常疾患が減少している現在において、有識者の知識を吸収し且つ経験を共有し合える場を提供すること、これが現代の手の先天異常懇話会の使命と感じております。ハイブリッド開催の趣旨のご理解を、何卒宜しくお願い申し上げます。

【先天異常分類マニュアル改訂とエビデンス構築方法に関する検討】

2021年度には、日手会手の先天異常分類マニュアル（改訂版2012年）の問題点を検討する一環として、母指多指症の形態に対する呼称のひとつである「カニ爪型」を「末節収束型」に変更し、用語集改訂第5版修正版に掲載されました。

2022年度は、特にⅢ：重複、Ⅳ：指列誘導障害にフォーカスを当てて、これらの領域についてエビデンスを提示できる方法について協議を行いました。その結果、母指多指症や裂手症の骨格形態バリエーションと手術成績との関係を明らかにし、最適な手術方法を探る研究プロジェクトを立ち上げることとなりました。まずは母指多指症について、委員会メンバーによる多施設共同研究を計画中です。

【構成員】担当理事：福本恵三、アドバイザー：関敦仁、（以下委員・敬称略）柿崎潤、洪淑貴、佐々木薫、佐竹寛史、高木岳彦、鳥谷部荘八、根本充、西村礼司、齊藤晋

倫理利益相反委員会

担当理事　**福　本　恵　三**
委員長　**安　田　匡　孝**

2022年度の本委員会は、担当理事の福本恵三先生、外部アドバイザーの塚田敬義先生、新アドバイザーで前委員長の辻本律先生、外部委員の山我美佳先生、新委員の楠原廣久先生と佐々木信幸先生、そして私、新委員長の安田匡孝でスタートしました。基本的に毎月の新入会申請者の認定審議をメールで行います。6月には日本医学会から新しいCOI規程を採択するにあたり、下部学会の規程（細則）との差異がないかの問い合わせが参りました。2つの規程を比べましたところ、委員長選任方法と委員の任期期間に差異があり、医学会にコメントを出しました。現在まだ医学会の規程は改正されていないようです。7月に、本委員会の今年度事業計画案を理事会に提出しました。理事会の諮問を受けて、最新の日本医学会COI管理ガイドライン2022にそった本学会のCOI指針、細則、Q & A、本委員会規程の見直しのため、ほぼ連日数ヶ月間にわたり本委員会で真摯に議論・改定し、理事会に上申した次第です。その中で、日手会雑誌論文投稿時のCOI申請にICMJE disclosure formを採用することになりました。関連委員会での審議を経て、2023年の本学会総会で改定内容が承認される見込みです。また、来年度から役員等のCOI自己申告書提出の時期の変更が行われる予定です。さらにQ & Aの見直しの中で、学術集会演題募集時のCOI申告書が本学会事務局に送付されていないことが判明し、理事会審議を経て、今後学術集会運営事務局に周知することとしました。例年行っている、役員等のCOI自己申告書の供覧を2022年12月にオンライン会議で終えました。以上ですが、関係の皆様に深謝します。

学術研究プロジェクト委員会

担当理事　**松　田　　健**
委員長　**加　地　良　雄**

【構成員】

2022年度学術研究プロジェクト委員会の構成員は、松田健担当理事、加地良雄委員長、安楽邦明委員、佐藤光太朗委員、四宮陸雄委員、関敦仁委員、高木岳彦委員、藤原浩芳委員、森谷浩治委員です。

【活動内容】

web会議を2022年11月14日に開催し、2022年度学術研究プロジェクトの選出、2023年度学術研究プロジェクトテーマの選定、過年度プロジェクトの進捗状況確認、英語論文賞の選出などを行いました。その他、適宜メール審議を行いました。

＜2022年度学術研究プロジェクトの選出＞

今年度の募集テーマは①手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究、②実臨床に寄与する基礎研究、③他科と連携する手外科とし、それぞれ3件、5件、0件、計8件の応募がありました。

新規性・独自性、妥当性・実現性、研究デザイン、国際性、倫理面への配慮等を評価項目として厳正な審査を行い、下記2件のプロジェクトを選出し、それぞれに50万円の助成をすることとしました。

- 京都大学大学院医学研究科形成外科　齊藤 晋　先生
  母指多指症の「重複領域」概念に基づく新規分類法を用いた手術成績の後向き研究
- 北海道大学大学院 医学研究院整形外科教室　木田 博朗　先生
  炎症誘導機構に着目したデュピイトラン拘縮における新規治療法の開発

＜2023年度学術研究プロジェクトテーマの選定＞

2023年度学術研究プロジェクトの助成総額は100万円とし、テーマは次の3つを選定しました。

① 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究
② 実臨床に寄与する基礎研究
③ 手外科領域におけるAI診療

＜過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況の確認＞

過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況を確認し、遅れなどのあるプロジェクトについては連絡を行いました。

＜英語論文賞（新設）について＞

今回新設された英語論文賞に22名の応募がありました。Impact Factor、関連する代表的な論文、新規性、独自性、国際性、手外科領域の臨床への貢献度、倫理面への配慮を評価項目として厳正な審査を行い、第1回英語論文賞に下記2名を選出しました。

● 産業医科大学整形外科　山中　芳亮　先生

Molecular and Clinical Elucidation of the Mechanism of Action of Steroids in Idiopathic Carpal Tunnel Syndrome. J Bone Joint Surg Am. 2021 Oct 6;103 (19) :1777-1787.

● 国立国際医療研究センター形成外科　山本　匠　先生

Subdermal Dissection for Elevation of Pure Skin Perforator Flaps and Superthin Flaps: The Dermis as a Landmark for the Most Superficial Dissection Plane. Plast Reconstr Surg. 2021 Mar 1;147 (3) :470-478.

＜学会と学術集会の連携強化について＞

日本手外科学会では、第56回学術集会で行われたシンポジウム：キャリアアップ委員会セッション「上司と歩む手外科女医キャリア」のような委員会が企画するセッションを学術集会会長に提案していくこととなり、その窓口を当委員会が担当することとなりました。今後、各委員会には学会セッションの企画を募集させていただきますので、ご協力をよろしくお願い致します。

今年度も日本手外科学会の学術・研究部門を支えるべく、担当理事のもと尽力してまいります。引き続き、ご指導・ご鞭撻をよろしくお願い致します。

専門医制度委員会

担当理事　**西　田　圭一郎**
委員長　**稲　垣　克　記**

専門医制度委員会は担当理事西田と稲垣委員長、池上 博泰先生、射場 浩介先生、垣淵 正男先生、栗本 秀先生、佐藤 和毅先生、島田 賢一先生、田尻 康人先生、田中 克己先生、辻井 雅也先生、森田 晃造先生、松村 一先生の各委員で活動しています。

2022年度は44名の先生方に新指導医となっていただき、合計502名の指導医が全国213施設で勤務されていることになりました。日本専門医機構からはサブスペシャルティ領域の認定審査において、外形基準は満たしているとされています。

昨年、手外科がサブスペ認定に至らなかった理由の一つとして、「理事・委員の中には、手外科を外傷外科と誤って認識している人がいるかもしれない」という懸念があります。もちろん救急外傷における高度救急救命センター認定のための切断指肢への対応に加えて、手外科専門医は、難度の高い手外科疾患への対応のみならず、悪性腫瘍の再建、変性疾患やリウマチ・膠原病、先天異常に対する外科的治療も行っており、さらに手外科の重要性を広くアピールしていく方策について、広報渉外委員会をはじめ関連各委員会と検討を始めております。また、「手外科はジェネラルな領域ではないから機構認定にせずに学会認定・機構承認のカテゴリーの方が相応しいのではないか」との日本専門医機構理事会審議での意見があったとの通知を受けておりますが、現状では「学会認定・機構承認のサブスペシャルティ」は 特に専門医の標榜が可能であるかどうかを含めていまだ不明な部分も多く、日

手会理事会としては引き続き機構認定サブスペを目指す方針としております。

2022年12月5日には日本専門医機構によるサブスペ領域の新規募集があり、12月8日に申請書類および今後の日程が送付されてきました。上記の手外科の重要性に加え、手外科は加齢や全身性の疾患に伴う手の症状を診察し、全身状態を把握し、手術だけでなく薬物療法・リハビリテーションを駆使して解決しているジェネラルな領域であることをさらに強調してレビューシートに盛り込みました。また、副島理事、原委員長、長田委員をはじめ、キャリアアップ委員会の先生方には地域医療への配慮や取り組みについて、御加筆いただきました。

今回も専門医および指導医の数や分布に関する調査が課せられており、レビューシートではサブスペ領域の常勤医による診療科または診療部門を有する施設、サブスペ領域の常勤医による週1回以上の専門外来がある施設が、大学病院本院、臨床研修施設、地域医療支援病院のそれぞれ何%あるのか、のデータが要求されていました。臨床研修病院は日手会データと照合するために、準備段階ですでに施設名称の統一化を行っておりましたが、今回機構から呈示された令和4年の臨床研修施設(1027施設)および地域医療支援病院(618施設)のリストが、前回の令和元年版リストから変更となっている(前回はそれぞれ1035施設、579施設)ことが判明しました。また、地域医療支援型病院のファイルでも臨床研修病院リストと病院名が一致していないこと、誤植も多いことから、目視による手作業での対応に追われました。

2022.12.19～5には、2020年の調査以降新規に専門医資格を取得した方、勤務する施設が異動となった専門医を対象に実態調査を行いました。年末のお忙しい中83%の回答をいただきました。ご協力いただいた専門医の先生方に御礼申し上げます。一方で手外科の認知度の実態を示すためには回答をいただけなかった38名を無視するわけにいきません。同じ施設の前回アンケート回答や実際に施設のHPを調査して「国民目線から」認知度を調査し、レビューシートに必要なデータを補完しました。得られたデータについて、担当理事、事務局で別個にレビューシートに必要なデータを集計し、互いに精査後、最終的に前回レビューシートと突き合わせて問題のないことを確認しました。残念ながらすべての大学病院本院に手外科専門医が在籍するという原則は満たしておらず、82施設中69施設(84%)です。また、臨床研修病院(大学病院本院を除く)の半数以上に1名以上の常勤医(サブスペシャルティ専門医)がいるという原則に対しても、現状では294/910(32.3%) 施設となっています。これらは専門医の質の担保と数の制限との関連もあり、より長期的な視野に立って検討していかないと解決できない問題であると言えます。記載内容は専門医制度委員会委員全員および三上容司先生(サブスペ連絡協議会手外科代表)、関連委員会でブラッシュアップを行いました。2023年1月23日には完成したレビューシートを日整会に提出し、機構の判断を待っている段階です。

今後の予定としましては2月16日に日整会から機構にレビューシートが提出された後、4月21日に機構理事会で承認されれば厚労省医道審議会の照会・報告を経て整備基準を8月31日までに日整会経由で機構に提出、という流れになっています。まだ多くのハードルを超えていかないと行けない状況ではありますが、各委員会一丸となって取り組んでまいります。会員の皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願いいたします。

専門医資格認定・施設認定委員会

担当理事　**古　川　洋　志**
委員長　**長谷川　健二郎**

今年度、専門医資格認定・施設認定委員会は、理事：古川洋志先生　アドバイザー：中尾悦宏先生　森田哲正先生　委員：荒田順先生　岩川紘子先生　金谷貴子先生　鎌田雄策先生　小橋裕明先生　齊藤晋先生　鳥居暁子先生　鳥山和宏先生　堀内孝一先生　本宮真先生　委員長：長谷川健二郎で開始しました。

2022年7月7日に第1回Web委員会を行い、指導医申請44名と認定研修施設新規申請6施設について審査を行い問題ないことが確認されました。また、専門医申請資格申請における、論文に関する規定の変更について岩崎理事長から本委員会に意見を求められ、本委員会で討論した結果をご報告しました。

2022年11月28日に第2回Web委員会議を開催し、認定研修施設【新規】審査を行い、基幹5施設、関連7施設において問題ない事が確認されました。認定研修施設【更新】審査も行われ、69施設、関連14施設において、3施設で書類の不備があり、修正していただくように依頼しました。また、新専門医認定申請書審査が行われ、新専門医認定申請者は71名の書類審査を行い、20名に不備・問題点を指摘され、再提出となりました。

2023年1月6日に第3回Web委員会議が開催され、再度、認定研修施設【更新】審査を行い、書類の不備があった3施設のうち1施設は専門医更新単位不足が解決できず、結果、基幹69施設、関連13施設が書類審査合格となりました。再度の新専門医認定申請書審査では、第2回Web委員会で不備・問題点を指摘された20名について、修正後の審査がおこなわれた。20名中2名が修 正不可能との返事があり不合格となり、18名が合格となりました。結果、新専門医認定申請者は71名で、書類審査では69名が書類審査合格となりました。

2023年2月20日に第4回Web委員会議 を行い、専門医更新手続きの審査を予定しております。専門医更新においては、専門医更新単位不足の先生方が複数名あり、今後事前に準備をしていただけるように注意喚起に努めたいと考えております。

専門医資格認定・施設認定委員会は、アドバイザーの先生方の御指導と委員の先生方の時間をかけた詳細なチェックのもとに成り立っており、大変感謝しております。引き続きよろしくお願い申し上げます。

専門医試験委員会

担当理事　**松　田　　健**
委員長　**内　藤　聖　人**

1：委員会メンバー

担当理事が松田健、委員長が内藤聖人、アドバイザーが長尾聡哉、南野光彦、西田淳、山崎宏、委員が尼子雅敏、新井健、岩倉菜穂子、奥井伸幸、幸田久男、佐々木薫、大安剛裕、竹内直英、田中啓之、

根本充、橋本一郎、長谷川和重の18名で活動しています。

業務は専門医試験問題の作成、専門医試験の実施、日本手外科学会誌の総説設問の査読です。

２：専門医試験問題の作成

新作問題の作成を担当理事・委員・アドバイザーが分野別に担当しました。試験問題のブラッシュアップはWeb会議ツール「Webex Teams」を用いて、行いました。

３：第13回専門医試験について

2022年4月16日、全国数カ所の受験会場においてComputer Based Testing方式で第13回専門医試験を行いました。

４：第14回専門医試験について

2022年度は、学術集会翌日の2023年4月22日（土）にステーションコンファレンス万世橋において、第14回専門医試験を行う予定です。3年ぶりに試験会場での開催となりますが、口頭試験は実施致しません。2023年2月23日に委員会を開催し、試験問題の最終ブラッシュアップを行い、最終的に試験問題数は50問（うち整形・形成分野別問題4問）を準備しました。試験後、委員会審議および理事会承認を経て試験結果をお知らせできる見込みです。

５：日本手外科学会誌の総説設問の査読

日手会雑誌に総説を執筆する先生は，専門医試験の様式に則った「新作問題と答え」を２問作成いただいております（総説設問）。この総説設問をWebex Teams上で担当理事・委員・アドバイザーが順次締切に併せてブラッシュアップしました。これまで編集委員会から30問の査読が終了し、編集委員会に送付しております。出版後に教育研修・オンラインジャーナル委員会に送付、順次Q&Aコーナーに掲載される予定です。

次年度も適切な専門医試験が実施されるよう引き続き準備を進めてまいりますので、会員の皆さまのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

カリキュラム委員会

担当理事　**内山茂晴**
委員長　**日高典昭**

2022年度のカリキュラム委員会は、内山茂晴担当理事（岡谷市民整形）のもと、委員は梶原了治（松山赤十字整形）、黒川正人（熊本赤十字形成）、高木誠司（福岡大形成）、田鹿毅（群馬大整形）、谷脇祥通（国吉整形）、山内大輔（福井済生会整形）の各先生から構成され、委員長は日高典昭（大阪市立総合医療センター整形）が昨年4月に坂野裕昭先生（平塚共済整形）から引き継いで務めています。

本委員会の主な業務は、専門医制度細則に則って教育研修講演の認定を行うことです。1か月毎に申請書類が委員に送られ、メール審議を行います。2022年4月から2023年1月までに申請された講

演数は合計186講演（申請書としては98件）、このうち無条件で承認したものが170講演、タイトルの変更や推薦状・要旨など追加書類の提出後に承認したものが9講演、非承認としたものが4講演、取り下げとなったものが3講演でした。

承認の適否は、先に示した細則と日手会教育研修講演に関するFAQにしたがって判断します。個々のケースで悩むことも少なくないため、FAQは適宜、修正しています。今年度は、項目⑨の講演時間などについてのQに対する回答として、「ただし2演題の場合は、2名の講師とも講師資格を満たす必要があります」という1文を追加しました。また、細則やFAQを読まずに申請したと思われる場合が少なくないため、申請書の中に「私は、『専門医制度細則第6章』および『教育研修講演に関するFAQ』に目を通しました」という1文を追加し、申請者にチェックいただく形式に変更しました。

申請された講演はいずれも素晴らしい講演と思われますので、可能な限り承認する方向で考えています。迅速に手続きを進めるためにも細則とFAQをよく読んでいただき、「手外科との明らかな関連性」が分かる形での申請をよろしくお願いいたします。

情報システム委員会

担当理事　**村　瀬　　剛**
委員長　**松　浦　佑　介**

【委員会構成】

情報システム委員会は、担当理事、村瀬 剛先生のもと委員長を私、松浦佑介が務め、委員として岡久仁洋先生、栗本秀先生、鈴木拓先生、松井雄一郎先生、宮脇剛司先生、吉井雄一先生、アドバイザーとして西浦康正先生にご助言をいただき、計9名のメンバーで活動を行っています。

【委員会活動】

本委員会では、日手会会員、専門医・指導医、研修施設など、様々なデータの一元的管理をシステム化する業務を行っております。様々な申請、手続きをシステム化することにより、作業量の削減を図り、日手会の事務局や会員の皆様に還元することを目的としております。現在システム改修の第2フェーズが大詰めを迎えております。2023年には研修認定施設管理システムを導入し、日手会入会、研修認定施設申請・更新作業、決済についてオンライン化することを目標としております。システム化するにあたり、専門医資格認定・施設認定委員会や倫理利益相反委員会などの関連委員会と合同会議を行い、よりユーザー目線に立ったシステム構築を進めていくとともに、それに合わせた細則の変更等、各所と連携を取って進めていく所存でございます。

さらに専門医機構の審査によって保留となっていた専門医申請・更新・承認業務のシステム化についても、前向きに作業を進めていく方針でございます。皆様が使いやすいシステム構築を目指し、順次進めてまいりますので、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます

Web会議等を以下の通り行いました

- 2022年6月14日 KCSとの打ち合わせ

：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認

- 2022年7月21日 KCSとの打ち合わせ
  ：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2022年8月25日 第1回情報システム委員会
  ：情報システム構築内容の確認・方針決定
- 2022年9月9日 KCSとの打ち合わせ
  ：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2022年8月25日 第1回専門医資格認定・施設認定委員会/情報システム委員会合同会議
  ：施設認定管理システムの内容の確認・方針決定

キャリアアップ委員会

担当理事　**副島　修**
委員長　**原　友紀**

キャリアアップ委員会は、日手会における男女共同参画と専門医数の地域格差に取り組むことを目的とした委員会です。今年はアドバイザーとして新関祐美先生（日本整形外科学会男女共同参画委員会委員長）をお迎えし、担当理事・委員長以下11名の委員で活動しました。

委員（敬称略）上里涼子、長田龍介、洪淑貴、千馬誠悦、恒吉康弘、長尾由理、中川夏子、林原雅子、日比野直仁、藤井裕子、牧野仁美

対面・Webの委員会を計３回開催し、その間はメール会議等で以下の活動を行いました。

【従来の活動の継続】

日手会ニュースJoyの声の運用、学術集会託児所開設に関する諸連絡・依頼、専門研修施設募集と現況調査、日手会HP内の委員会ページの更新を行いました。

【キャリアアップ委員会セッションの企画・開催】

第65回学術集会で委員会セッションとしてシンポジウム：上司と歩む手外科女医キャリアを企画・開催しました。手外科専門医を取得した女性医師とそれを支えた上司のペアで登壇頂き、どのようにキャリアを積んだか様々な経歴をご紹介頂き、大変好評でした。第66回学術集会では男性医師の立場から男女共同参画を考えるシンポジウムを日比野委員・長尾委員が企画、育児休暇を取得した経験や男性の立場から男女共同参画に取り組んでいる先生方にご口演頂きます。

【キャリアアップ相談窓口の開設】

日手会ホームページ内に会員からキャリアアップに関する相談を受け付ける相談窓口を開設しました。ご相談お待ちしております。

【国際委員会・理事会へのオブザーバー出席】

女性の活躍推進に関する活動として、女性トラベリングフェロー・女性理事の誕生を目指し、国際

委員会に洪淑貴委員が、定例理事会に原委員長がオブザーバー出席しました。

【日本医師会　女性医師支援センターの補助金事業による座談会の開催】

林原委員が中心となり企画・準備し、女性医師のキャリア形成をテーマとしたWeb座談会を2023年1月21日に開催しました。第65回学術集会で行ったシンポジウム：上司と歩む手外科女医キャリア の各シンポジストの先生がプレゼンテーションを用い、医学生・研修医を含む42名の参加者と活発な意見交換ができました。男性の代議員の先生も参加下さり、和気藹々とした雰囲気であっという間の2時間でした。学生・研修医との座談会は日本手外科学会としては初めての試みでしたが、参加者アンケートの結果も非常に好評でした。男性研修医の参加もあり、若い世代では男女共同参画が進んでいることを実感しました。来年以降もぜひこの事業に応募し、手外科の魅力を後進に伝えていきたいと思います。

特別委員会

定款等検討委員会

担当理事　**内　山　茂　晴**
委員長　**上　原　浩　介**

【委員会メンバー】

当委員会は、担当理事：内山茂晴、委員長：上原浩介、岩川紘子、岩月克之、大谷和裕、川勝基久、櫻庭実、前田和洋、松本泰一、村田景一、横田淳司の各委員の計11名で活動を行いました。今年度も、手外科学会の将来を見据えた重要な議題が複数ありました。今年度もコロナ禍の影響から対面審議は行うことができず、全ての活動をメール審議のかたちで行いました。

【委員会活動】

1. 理事枠増設

現在の理事数は定款により8名以上12名以内となっています。現在、3～4つの委員会を担当している理事が数人おり過重な負担がかかっています。担当委員会数を1～2つ程度とし理事の負担の軽減をはかりたい点、複雑化する案件に理事会が柔軟に対応するため多様な人材の中から、例えば性別における多様性を重視するなどして理事を登用しやすくする必要が考えられる点から、理事2名の増員が提案され、理事会での承認を経て、「定款 第5章役員（役員）第25条」の理事数の変更を行いました。理事数増員については総会での承認を必要とします。

2. 日本医学会COI管理ガイドライン2022年改定

日本医学会COI管理ガイドライン2022年改定に伴い、倫理相反委員会が作成した「日本手外科学会における事業活動の利益相反（COI）に関する指針及び細則」、「利益相反委員会規定」の改定案の検討・修正を行いました。

3. 所属施設管理への厚労省施設コードの使用

現在、情報システム委員会により施設認定管理システムの構築が進められており、新しいシステムでは所属施設管理に厚労省施設コードの使用が検討されています。そのためには、現行の診療科単位での申請区分を廃止し、１施設１登録とする施設区分を一元化する必要があり、「細則第 6 号第 21 条（研修施設の申請）」、「細則第 6 号第 20 条（研修施設及び申請資格）」情報システム委員会の案を検討・修正しました。また、様式 4-1 および 4-4（基幹および関連研修施設認定申請 書）」の“診療科責任者”署名欄を廃止することとなりました。

以上、今年度の活動報告とさせていただきます。多忙な業務の中にもかかわらず、貴重な意見を出し、活発に議論いただきました委員会委員の先生方、審議の過程でご協力をいただきましたシステム委員会・利益相反委員会委員の各先生方に、この場をお借りして深謝いたします。

手外科専門医検討委員会

担当理事　**副　島　　修**
委員長　**三　上　容　司**

2022年度の手外科専門医検討委員会は、日本専門医機構の新専門医制度におけるサブスペシャルティ領域認定を目指して、副島　修担当理事のもと助川浩士、田中克己、吉井雄一、吉田史郎、三上容司の５名の委員と加藤博之、矢島弘嗣の２名のアドバイザーで構成されています。三上委員長がサブスペシャルティ連絡協議会に日手会代表委員として参加し、基本領域学会との連携・調整を図るとともに、連絡協議会を通じて専門医機構とのやり取りを行っています。

2022年１月に日手会として手外科領域のサブスペシャルティ領域認定を目指してレビューシート（申請書）を提出しましたが、日本専門医機構のサブスペシャルティ領域検討委員会の審査後、理事会での審議を経て2022年５月に認定しないとの通知が届きました。その後、日手会としては再度、機構認定サブスペシャルティ領域を目指すことになりましたので、2022年６月30日に委員会を開催し、今後の対応方針を検討しました。専門医機構の回答から、機構の理事、委員の一部に手外科が外傷外科であるとの誤解があるようでしたので、手外科の全体像を理解してもらえるように専門医機構の委員へ働きかけることが重要だとの結論に至りました。また、機構認定サブスペシャルティ領域の認定基準として、全国の大学病院の本院に専門医が１人以上いることが求められていますが、手外科はこれを満たしていないため、手外科専門医が不在の大学病院に対しても日手会として何らかの働きかけをすべきではないかとのことで、これらの点を理事会に上申しました。

その後、専門医制度委員会の西田理事を中心に作成いただいたレビューシートを2023年１月にサブスペシャルティ領域連絡協議会に提出しました。レビューシートは２月中に日本専門医機構に送られ、その後、機構の委員会での審査を受ける予定です。

また、広報渉外委員会の古川理事を中心に、手外科の全体像がわかるような資料を作成していただきましたので、これを利用して機構のサブスペ領域検討委員会のメンバーに個別に日手会会員が現

状を説明できるように調整中です（2023年1月末日現在）。

当委員会といたしましては、日手会（手外科領域）がサブスペシャルティ領域として専門医機構に認定されることを目指して、他の専門医関連委員会と連携しつつ、他の委員会の枠におさまらない役割を担っていく予定です。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

将来展望戦略委員会

担当理事　**篠原孝明**
委員長　**山本真一**

2022年度将来展望戦略委員会のメンバーは、担当理事の篠原孝明先生（大同病院）、アドバイザーに平田仁先生（名古屋大学）、委員に髙木誠司先生（福岡大学）、西浦康正先生（筑波大学土浦市地域臨床教育センター）、日高典昭先生（大阪市立総合医療センター）、村瀬剛先生（ベルランド総合病院）、委員長の山本真一（横浜労災病院）で構成されています。

本委員会は、アンケート調査対応委員会として2020年度に発足し、手外科に関する研究をエビデンスのより高いものにすることを目指して、古川前担当理事・岸前委員長のご尽力によって、2021年11月3日に多職種によるオンラインフォーラム（テーマ：手の変形性関節症）が開催されました。その後、2022年7月19日の第1回、8月16日の臨時委員会（web）を経て、委員会設立の究極の目的は手外科認知度向上であることを再確認し、企業とも連携して市民理解を目指し、同時にsubspeciality領域を目指す学会として、その必要性について長期的な学会活動方針・目標の戦略的検討を行うこととなりました。

10月15日の第2回委員会では、委員会名称を「将来展望戦略委員会」に変更することとし、後日理事会の承認を頂きました。そして、認知度向上や企業との連携探求の企画を理事会へ提案し実践することを活動方針としました。その中で、オンラインフォーラムにこだわらず、学術集会での企業研究者や市民代表を含む合同公開シンポジウムなども想定することとなり、初回は更年期女性疾患にターゲットを絞ることにしました。また、手外科医の認知度向上のための広報ポスター・パンフレットを製作し、各専門医在籍医療機関外来などに配布する提案があり、古川担当理事・寺本委員長とのメール審議を経て、広報渉外委員会の新規事業として委託することになりました。

12月19日の第3回委員会では、更年期女性手外科疾患に絞ったキャッチフレーズを「メノポハンド（Menopausal Hand）」に決定しました。尚、最初に考案・使用されていた平瀬雄一先生には、使用の承諾を頂きました。また、具体的には、変形性関節症・腱鞘炎（ばね指など）・手根管症候群・橈骨遠位端骨折（骨粗鬆症含む）をテーマに挙げ、参加企業を募り、2024年度学術集会で合同（公開）シンポジウムを企画・発信することを目指すこととなりました。

このように本委員会は2ヵ月程度毎にweb会議を行っており、今後は具体的な企画内容を議論していく予定です。手外科の認知度向上を目指して、会員皆様の御理解と御協力をよろしくお願い申し上げます。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第 66 回日本手外科学会学術集会◆

会　　期：2023年4月20日（木）～21日（金）
会　　場：京王プラザホテル（新宿）
会　　長：佐藤 和毅（慶應義塾大学 医学部 スポーツ医学総合センター 教授）
詳　　細：https://site.convention.co.jp/jssh2023/

◆ 2022 年度教育研修会◆

会　　期：2023年1月20日（金）～3月20日（月）
会　　場：WEB開催
ＵＲＬ：https://jssh-2022.c-cloud.co.jp/
主　　管：日本手外科学会 教育研修オンラインマガジン運用委員会

◆第 67 回日本手外科学会学術集会◆

会　　期：2024年4月25日（木）～26日（金）
会　　場：奈良県コンベンションセンター
会　　長：面川 庄平（奈良県立医科大学 手の外科学講座）
詳　　細：https://naraseikei.com/67jssh/

関連学会・研修会のお知らせ

◆第 66 回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会　　期：2023年4月26日（水）～28日（金）
会　　場：出島メッセ長崎
会　　長：田中 克己（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻 形成再建外科学 教授）
詳　　細：https://www.congre.co.jp/jsprs2023/

◆第 35 回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会　　期：2023年4月22日（土）～23日（日）
会　　場：御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター
開催方法：ハイブリット開催（現地開催およびオンデマンド配信）
会　　長：飯塚 照史（奈良学園大学保健医療学部）
詳　　細：https://meeting.jhts.or.jp/web/35/

◆第 96 回日本整形外科学会学術総会◆

会　　期：2023年5月11日（木）～14日（日）
会　　場：パシフィコ横浜
会　　長：尾﨑 敏文（岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授生体機能再生・再建学講座（整形外科学））
詳　　細：https://joa2023.jp

◆第 15 回日本手関節外科ワークショップ◆

会　　期：2023年9月30日（土）
会　　場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
会　　長：森谷 浩治（一般財団法人 新潟手の外科研究所 所長）
詳　　細：https://shinsen-mc.co.jp/jwsw15/

◆第 34 回日本末梢神経学会学術集会◆

会　　期：2023年9月8日（金）～9日（土）
会　　場：京都府民総合交流プラザ 京都テルサ
会　　長：柿木 良介（近畿大学医学部 整形外科 教授）
詳　　細：https://www.acplan.jp/jpns34/index.html

◆第 36 回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会　期：2023年7月16日（日）～17日（月・祝）
会　場：幕張メッセ　国際会議場
会　長：白土 英明（千葉県臨床整形外科医会 顧問／船橋整形外科病院 院長）
詳　細：https://www.c-linkage.co.jp/jcoa36/

◆第 32 回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会　期：2023年10月19日（木）～20日（金）
会　場：ステーションコンファレンス東京
会　長：三鍋 俊春（埼玉医科大学総合医療センター 形成外科・美容外科 教授）
詳　細：http://jsprs-kiso2023.umin.jp/

◆第 38 回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会　期：2023年10月19日（木）～20日（金）
会　場：つくば国際会議場
会　長：山崎 正志（筑波大学 医学医療系 整形外科 教授）
詳　細：https://site2.convention.co.jp/joakiso2023/

◆第 50 回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会　期：2023年12月7日（木）～8日（金）
会　場：名古屋国際会議場
会　長：亀井 譲（名古屋大学 形成外科 教授）
詳　細：HP準備中

◆第 34 回日本小児整形外科学会学術集会◆

会　期：2023年11月23日（木・祝）～24日（金）
会　場：神戸国際会議場（神戸ポートアイランド）
会　長：薩摩 眞一（兵庫県立こども病院 副院長）
詳　細：HP準備中

編　集　後　記

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けを季節性インフルエンザと同等の「5類」に引き下げる方針が示されるなど、ようやく“かつての日常”、“新たな日常”へと先を見通すことができるようになりました。このタイミングで日手会ニュース57号をお届けできますことを嬉しく思いますとともに、発行にあたりご多忙にもかかわらずご執筆いただきました先生方に深く御礼申し上げます。

北九州で開催されました第65回学術集会につきまして、酒井昭典会長よりご寄稿を賜りました。「2、3年ぶりにお会いする手外科の先生方も多く、対面での開催に感謝の言葉をいただきました。」との一文を拝読し、私自身会場で“人と人が集う学会がなんと素晴らしいものなのか”と痛感したことを思い起こしました。

市原理司先生より「招待国として参加した2023 American Association for Hand Surgery (AAHS)を振り返って」、別府諸兄先生より「日本手外科学会(JSSH)国際委員会の思い出」のご執筆を頂きました。お二人の先生からは、今まさに本学会が世界で認められ高く評価されていること、そしてそれが諸先輩方の長年の多大なるご尽力をもとに成し遂げられたことを教えていただきました。

「手外科医のリスクマネジメント」は日高典昭先生、「Joyの声」は大泉尚美先生、「リレーエッセイ」は赤石渉先生にご担当いただき、大変貴重な知見とご経験をお示しいただきました。新企画「認定施設紹介」では、項数制限のないWeb配信の利点を活かしご応募頂いたご施設全てを掲載いたしました。特にこれから研修を希望される先生におかれましては、まさに“目から鱗の”情報源となったと思います。

4月に佐藤和毅会長よりご挨拶を頂戴いたしました第66回学術集会が開催されます。『原点と挑戦』をテーマに京王プラザホテルに集い、意義深い時を過ごせますことを心より楽しみにしております。

（文責：西能病院整形外科　堂後隆彦）

広報渉外委員会
（担当理事：古川洋志，委員長：寺本憲市郎，アドバイザー：岸　陽子
委員：金谷耕平，佐藤光太朗，堂後隆彦，中川夏子，原　友紀）